

茨城県結城郡八千代町大字菅谷

権 現 山 遺 跡

—集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査—

2011

八千代町教育委員会

序 文

平成21年2月に、集合住宅建設に伴い権現山遺跡の発掘調査を実施しました。権現山遺跡は、昔から縄文土器が多く出土する遺跡として知られており、発掘調査に先立つ試掘確認調査でも、完形品に近い縄文土器が出土し、発掘調査への期待が膨らみました。

発掘調査は約200m²の範囲で、縄文時代のものは竪穴住居跡が1軒発見されました。が、これは町内では初めてのことでした。一方で、意外な発見もありました。当初全く予想していなかった中世の地下室が3基も発見されたことです。これもまた町内では初めての発見で、県西地方でも鬼怒川以西では、まだ4、5か所の遺跡でしか調査例がありませんので、今後の歴史研究に貴重な資料を提供できることをうれしく思います。

発掘調査から報告書作成までご協力いただきました関係者のみなさまに心から感謝申し上げ、本報告書が広く活用されることを期待して、あいさつのことばといたします。

平成23年3月

八千代町教育委員会教育長 高橋 昇

例言

1、本書は茨城県結城市八千代町大字菅谷字香取西 124 番地における集合住宅建設工事に先立って実施した椎現山遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査の期間・面積は次のとおりである。

期間：平成 21 年 2 月 17 日～3 月 23 日 調査面積：約 203 m²

3、発掘調査および整理作業は八千代町教育委員会が主体となって実施した。調査組織は以下のとおりである。

八千代町教育委員会教育長 高橋 昇

事務局 八千代町教育委員会 生涯学習課

調査員 山野井哲夫 調査協力 生涯学習課職員

調査作業員 小菅 昭 為我井憲次 平山力ネ

4、現地発掘調査は、上記期間、八千代町教育委員会山野井哲夫が担当して行った。整理作業は、平成 21 年度に遺物の台帳作成・水洗・注記・接合・写真撮影を行い、遺物実測・図面整理・トレスは、平成 22 年 6 月から平成 23 年 1 月にかけて、山野井の指導の元、及川謙作、新垣清貴、村山 卓がこれに従事した。また、報告書編集は村山が担当し、犬竹智裕、砂生智江がこれを補佐した。

5、整理作業の担当は以下のとおりである。

遺物洗浄・台帳作成・注記：山野井 遺物接合：山野井・新垣 遺物実測・拓本：及川・新垣・村山
図面整理：山野井 トレス・版組：村山・犬竹・砂生 写真撮影：山野井

6、本書の執筆は第 I～II 章・第 III 章第 1 ～ 4 節・第 V 章を山野井、第 III 章第 5 節・第 IV 章第 1 節を新垣、第 III 章第 6 節を及川、第 III 章第 7 節・第 IV 章第 2 節を村山が担当した。執筆担当者名は本文各文末に示した。

7、当遺跡は平成 18 年に隣接地を試掘・確認調査しているが、その際出土した縄文土器は、当遺跡の特徴を示す資料として一部本報告書に掲載した。

8、発掘調査及び試掘・確認調査に係わる遺物・図面・写真等の資料は八千代町教育委員会で保管している。

遺物：収納コンテナ 5 箱

図面：遺構実測図（1/20）・遺物実測図・拓本図

写真：35 mm カラーフィルム・リバーサルフィルム・モノクロフィルム・デジタルデータ画像

9、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで下記の機関・諸氏よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）

福島三男 大東建託株式会社 有限会社 S K C 有限会社矢中建設 下妻広域シルバー人材センター

茨城県教育庁文化課 赤井博之 斎藤弘道

凡例

1、本書に用いた図面の縮尺は、各図版に添付したスケールによる。遺構に関しては、全体図を 1/100、個別実測図のうち住居跡を 1/50、井戸跡・地下式坑・土坑を 1/40 で掲載した。遺物に関しては 1/3 を基本とし、石器・石製品等の一部を 1/4、鉄製品を 1/2 で掲載した。

2、出土遺物（土器類）の色調判断は、「新版標準土色帳」（日本色研事業株式会社）を用いた。

3、遺物実測図に用いたトーン・記号は以下のとおりである。なお、石器・石製品のうち、石皿類・石棒の遺存面には、間隔の一定しないドット表現を用いた。



目次

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査概要 ······	1
第1節 調査に至る経緯 ······	1
第2節 調査の方法 ······	2
第3節 調査の経過 ······	3
第4節 基本層序 ······	3
第Ⅱ章 遺跡の概要 ······	4
第1節 遺跡の立地と地理的環境 ······	4
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境 ······	5
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物 ······	7
第1節 遺構の概要 ······	7

第2節 縄文時代の遺構 ······	8
第3節 中世の遺構 ······	9
第4節 その他の遺構 ······	13
第5節 縄文時代の遺物 ······	14
第6節 古代の遺物 ······	20
第7節 中世の遺物 ······	20
第IV章 考察 ······	24
第1節 権現山遺跡における縄文時代概観 ······	24
第2節 中世の出土遺物 ······	24
第V章 総括 ······	27
報告書抄録 ······	29
写真図版 ······	31

挿図目次

第1図 調査区位置図 ······	1
第2図 試掘・確認調査区配置図 ······	2
第3図 基本土層模式図 ······	3
第4図 通路西側地形図 ······	4
第5図 周辺遺跡分布図 ······	6
第6図 発掘調査区会員図 ······	7
第7図 第1号住居跡実測図 ······	8
第8図 第1号井下跡実測図 ······	9
第9図 第1号地下式坑穴測図 ······	10
第10図 第2号地下式坑穴測図 ······	11
第11図 第3号地下式坑穴測図 ······	12
第12図 十字穴測図 ······	13
第13図 出土遺物実測図1（縄文時代） ······	15
第14図 出土遺物実測図2（縄文時代） ······	16
第15図 出土遺物実測図3（縄文時代） ······	17
第16図 出土遺物実測図4（縄文時代） ······	18
第17図 山土遺物実測図5（古代） ······	20
第18図 出土遺物実測図6（中世） ······	21
第19図 出土遺物実測図7（中世） ······	22
第20図 権現山遺跡出土カワラケ・石臼の関連資料 ······	25
第21図 鬼怒川・小貝川流域の地下式坑洞古遺跡分布図 ······	28

写真図版目次

(写真図版1) ······	31
調査区全貌	
第1号住居跡・東西ベルト十肩断面	
第1号住居跡・南北ベルト土層断面	
第1号住居跡出土状況	
第1号住居跡遺物出土状況	
第1号住居跡出土縄文土器	
(写真図版2) ······	32
縄文時代の土器・石器	
(写真図版3) ······	33
第1号井・梯土層断面	
第1号井戸跡光発状況	
第1号地下式坑土層断面	
第1号地下式坑壁竪部分十肩断面	
第1号地下式坑壳状況	
第1号地下式坑出土遺物	
第2号地下式坑竪坑部分遺物出土状況	
(写真図版4) ······	34
第2号地下式坑竪坑部分遺物出土状況	
第2号地下式坑壳状況	
第2号地下式坑壳状況	
第3号地下式坑出土遺物	
第3号地下式坑壳状況	
第3号地下式坑出土遺物・縄文状況	
(写真図版5) ······	35
第3号地下式坑壳状況	
第3号地下式坑出土遺物	
第3号地下式坑出土被熱磧	
第3号地下式坑出土十肩縛ヘラ鉗み	

表目次

表1 周辺遺跡一覧表 ······	6
表2 出土遺物觀察表（縄文時代遺物） ······	18
表3 出土遺物觀察表（古代・中世遺物） ······	23

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成18年11月22日、集合住宅建設にあたり埋蔵文化財の照会があった。計画地は約2,000m²で現状は畠であるが、権現山遺跡の範囲内にあるため、事業者と協議の上、試掘・確認調査を実施し、遺構の状況を確認することになった。(平成18年11月28日回答)

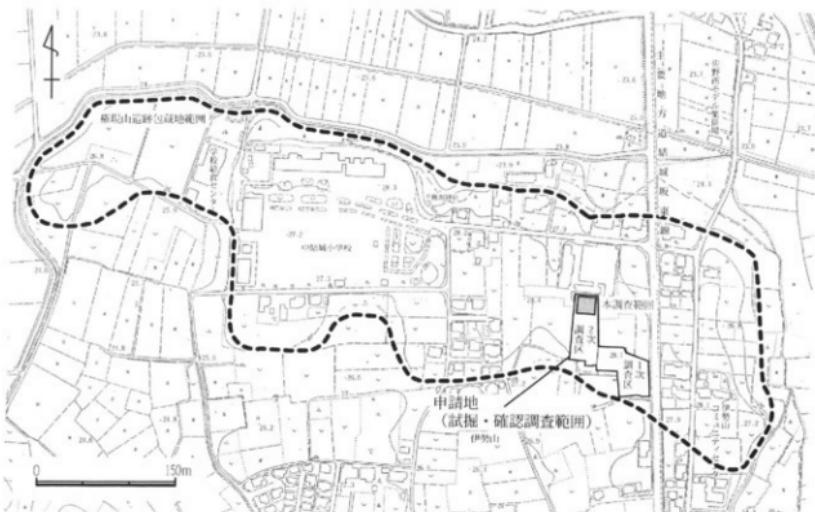
試掘・確認調査は、平成18年12月11日から12月13日にかけて実施した。その結果、中世以降と判断される土坑数基と溝跡などの遺構と縄文時代の遺物包含層の範囲を確認した。遺物包含層内で特に遺物が集中している部分は、発掘調査が必要と判断されたが、事業者との協議で計画の一部を変更することで調整することができ、工事立会で対応することになった。(1次)

(土木工事の届出: 平成18年12月15日、埋蔵文化財の通知: 平成19年2月2日)

平成20年10月21日、前回建設された集合住宅地の西側に隣接する約2,000m²の畠に、同事業者から再度集合住宅を建設するにあたり埋蔵文化財の照会があった。計画地は同遺跡の範囲内にあるため、平成20年11月25日から11月27日にかけて試掘・確認調査を実施した(平成20年10月22日回答)。その結果、計画地北側の調査区で、縄文時代の竪穴住居跡及び中世以降と判断される土坑3基が集中して確認された。(2次)

(土木工事の届出: 平成20年12月5日、埋蔵文化財の通知: 平成21年1月15日)

遺構が確認された範囲は、集合住宅が1棟建設される予定で計画変更が難しく、遺跡の現状保存が困難であることから発掘調査が必要と判断された。発掘調査は、事業者との協議で集合住宅が建設される範囲約203m²を対象とし、事業者負担により八千代町教育委員会が実施することになった。発掘調査は、平成21年2月17日から開始した。



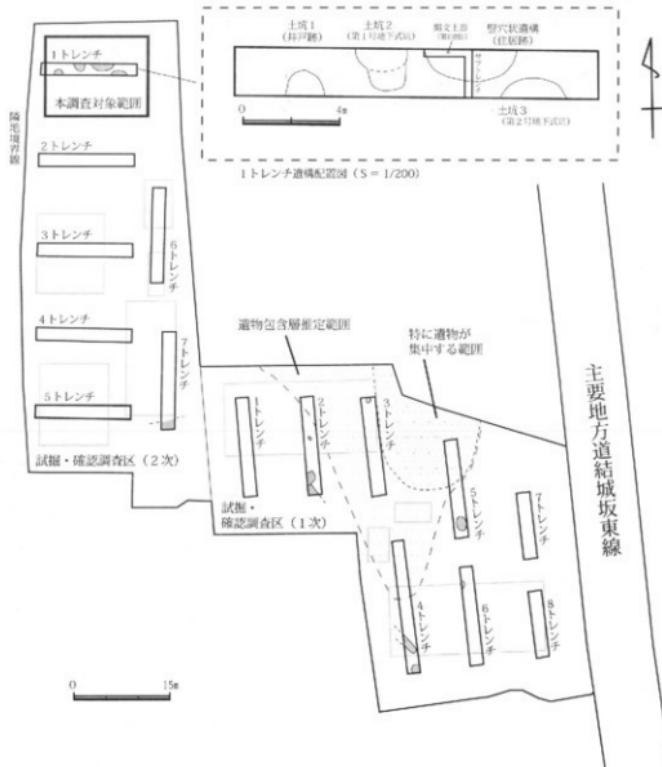
第1図 調査区位置図(八千代町都市計画図1/2,500を縮小して使用)

第2節 調査の方法

(1) 試掘・確認調査

平成18年12月に実施した試掘・確認調査(1次)では、幅2mで長さ20mが1本、長さ15mが5本、長さ10mが2本、計8か所のトレンチを設定した。表土下約45cmでローム層上面に達し、直径1~2mの土坑4基(2~6トレンチ)、幅約1.4mの溝状の跡1本(2・4トレンチ)及び焼土跡1か所(2トレンチ)が確認された。これらに伴う遺物は無く、覆土はいずれも黒色土にロームが混入した土で、中世以降の時期と判断された。出土遺物は3~5トレンチにかけて縄文時代中期から後期にかけての土器片が多量に出土した。3・5トレンチの北端に幅50cmのサブトレンチを入れたところ、3トレンチで厚さ約20cm、5トレンチで厚さ約40cmの縄文期の遺物包含層を確認した。(出土土器は一部本報告書に掲載)

平成20年11月に実施した試掘・確認調査(2次)では、幅2mで長さ15mのトレンチを7本設定した。表土下約30cmから40cmでローム層上面に達し、1・7トレンチで遺構が確認された。出土遺物は縄文土器の小片が僅かに出土した程度であった。1トレンチで確認された遺構は、土坑3基及び竪穴状遺構の一部である。3基の土坑は、その後の発掘調査によって、中世の井戸跡及び地下式坑と確認された。竪穴状の遺構は、確認作業中に出土し



第2図 試掘・確認調査区配置図

た大型の縄文土器片を中心に、幅 30 cm のサブトレーナーを L 字状に掘削したところ、深さ約 20 cm で床面と考えられる硬化した面が確認されたことから、竪穴住居跡と判断された。大型の縄文土器片は床面で横位の状態になったほぼ完形の深鉢形土器であることが確認された。

7 トレンチで確認された遺構は、深さ約 60 cm、上幅約 1.6 m の溝状の遺構である。1 トレンチの上坑と同じ黒色土の覆土の状況から中世以降の時期と判断された。

(2) 発掘作業・整理作業

発掘調査は、試掘・確認調査（2 次）で検出した縄文時代の竪穴住居跡及び中世以降と判断された土坑の調査を中心とした。まず調査範囲を設定し、重機により厚さ 30 cm から 35 cm の表土層を除去した。次に日本平面直角座標第 IX 系座標に基づく基準点を求め、調査区内に 5 m 間隔のグリッドを設定し遺構確認を行った。確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 1 軒、大型の上坑 4 基、その他小型の土坑 10 基を確認した。大型の土坑 4 基は、調査の過程で中世の井戸跡 1 基及び地下式坑 3 基であることが確認された。

遺構の調査は、土坑は、長軸方向で半裁し調査をすすめた。縄文時代の住居跡は、東西及び南北方向の十字に上層観察用のベルトを設定し 4 区に分けて調査を進めた。出土遺物は、覆土を上・中・下層に分けて取り上げ、一括して確認されたものは記録を取った後取り上げた。すべての遺構の調査が終了した後、調査区全体の写真を撮影し、埋め戻して調査を終了した。

整理作業は、写真・図面等の記録類及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元・撮影まで八千代町教育委員会が行い、遺物の実測・拓本・観察等は専門の研究者の協力を得て実施した。

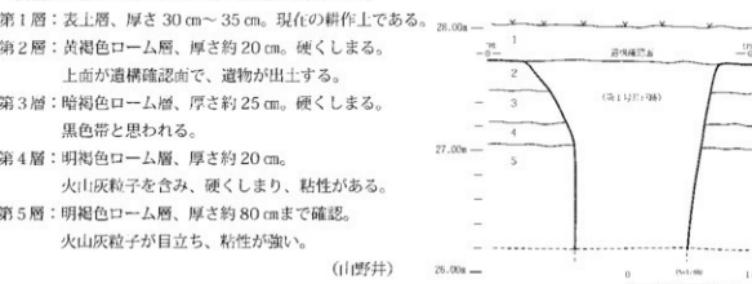
第3節 調査の経過

発掘作業は、平成 21 年 2 月 17 日から 3 月 23 日かけて実施したが、実働日数は 16 日間である。主な遺構の調査経過は次のとおりである。

- ・2 / 17 (火) ~ 2 / 19 (木) : 調査準備、調査区設定、表土除去、遺構確認
- ・2 / 24 (火) : 基準杭設定等、遺構確認、遺構調査開始
- ・2 / 25 (水) ~ 2 / 26 (木) : 井戸跡及び第 1 号地下式坑土層調査、第 2 号地下式坑掘削
- ・3 / 2 (月) : 井戸跡完掘・記録作成、第 1 号地下式坑・第 2 号地下式坑・第 3 号地下式坑掘削、外
- ・3 / 3 (火) ~ 3 / 5 (木) : 第 1 号地下式坑完掘、第 2 号地下式坑及び第 3 号地下式坑掘削・土層調査、外
- ・3 / 9 (月) ~ 3 / 10 (火) : 第 1 号地下式坑記録作成、第 2 号地下式坑・第 3 号地下式坑完掘、外
- ・3 / 11 (水) ~ 3 / 13 (金) : 縄文時代住居跡調査、第 2 号地下式坑及び第 3 号地下式坑記録作成、外
- ・3 / 16 (月) ~ 3 / 17 (火) : 縄文時代住居跡土層調査、床面調査、記録作成、外
- ・3 / 18 (水) : 終了写真撮影・現場片付
- ・3 / 23 (月) : 埋め戻し

第4節 基本土層

調査区の基本土層は、井戸跡の掘削面で観察した。



第 3 図 基本土層模式図

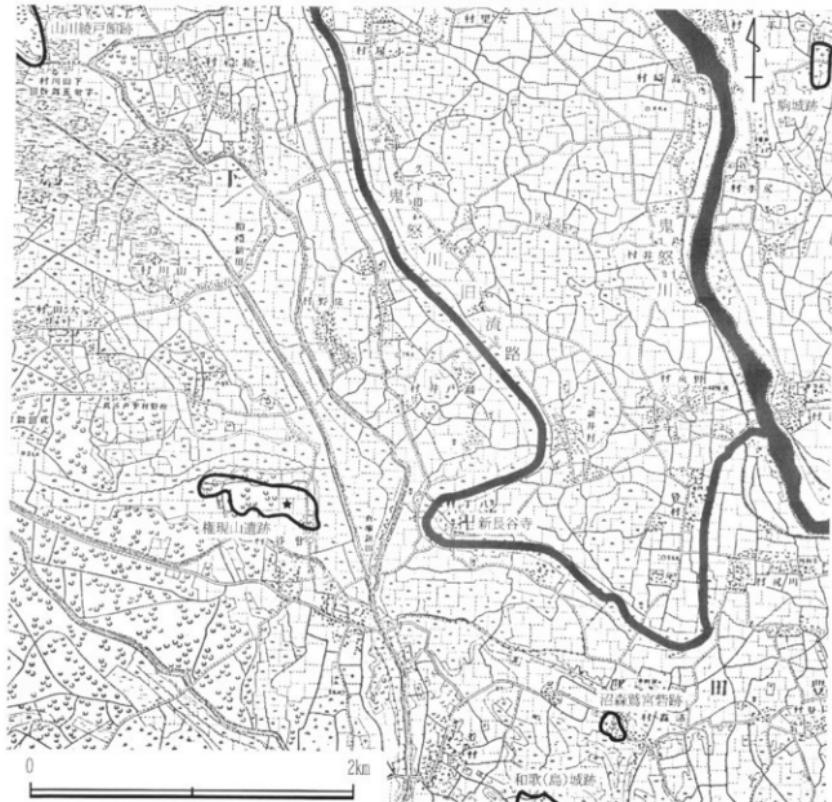
第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地と地理的環境

八千代町は、関東平野のほぼ中央、茨城県県西地区に位置し、東は南流する鬼怒川に接している。北西部から南東部にかけて洪積台地である結城台地からなり、東部は沖積地である鬼怒川右岸の低地、南部は飯沼川の低地から結城台地の奥深くまで続く開析谷が形成されている。

権現山遺跡は、八千代町の中結城地区大字菅谷に所在する。遺跡が立地する台地は、東側は鬼怒川右岸の低地、北側はこの低地から結城台地に深く入り込んだ北沼と呼ばれる幅約 150 m の谷津田に面し、西側は北沼につながる谷津田に囲まれる。遺跡は、北沼を臨む標高 24 m から 28 m の台地沿いに立地し、分布調査による遺跡の広がりは、東西約 750 m、南北約 250 m の広範囲に及ぶ。現状は、小学校敷地、給食センター敷地、県道、宅地、畑、山林である。

昭和 24 年に小学校用地の整地中に多量の縄文土器や石器が出土したことから、当遺跡は縄文時代を中心とした集落遺跡として知られている。分布調査では、旧石器時代・縄文時代早期・前期・中期・後期・奈良・平安時代の遺物が採取されているが、今回の発掘調査で中世まで下ることが確認された。



第4図 遺跡周辺地形図(明治17年 速報図 1/20,000を縮小して使用)

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

権現山遺跡が所在する結城台地上には、東側に広がる鬼怒川低地に面した台地縁辺部及び台地に入り込んだ北沼の縁辺部に多くの遺跡が立地する。

旧石器時代の遺跡は現在町内で8遺跡が確認されているが、権現山遺跡周辺では、当遺跡から出土した貝岩製の小型のナイフ形石器のみである。縄文時代になると周辺では6遺跡見られるが、いずれも中期あるいは後期になってからの遺跡で、早期・前期の土器を出土する遺跡は当遺跡のみである。町内でも早期の遺跡は6遺跡と少なく、前期になると30遺跡に増加するが、この時期は縄文海進により霞ヶ浦水系では古鬼怒湾が形成され、八千代地方近くまで古鬼怒湾の奥部が迫っていたと考えられる。

広範囲な権現山遺跡の中でも、縄文時代の各時期によって中心となる地域を異にしている。旧石器を含め早期（田戸下層式・鶴ヶ島台式）・前期（黒浜式・浮島式）の時期は、北沼の奥に入った遺跡西端部の舌状台地の範囲に集中している。中期（阿玉台式・加曾利E式）になると遺跡中央部から東部の鬼怒川低地に面した地域、後期（堀之内式・加曾利B式・安行I式）では中央部から南部にかけて遺跡の広がりが見られる。権現山遺跡は、他の縄文時代の遺跡と比べて、遺跡の規模だけでなく遺物の出土量も多く、早期から後期まで継続する町内でも有数な縄文時代遺跡である。当遺跡以外で注目すべきは、大山道南遺跡(22)からは後期のみみずく形土偶が出土しており、町内でも上偶を出土する数少ない遺跡の一つである。

弥生時代の遺跡は、町内では15遺跡確認されているが、権現山遺跡周辺では現在のところ確認されていない。

古墳時代の集落跡は、北沼を挟んで権現山遺跡の対岸に立地する旧中結城小学校庭遺跡(6)で、平成12年の発掘調査で古墳時代後期の竪穴住居跡の一部が確認されている。古墳は当遺跡周辺では5基の円墳が確認されているが、直径40m・高さ5mの天神塚古墳(18)、直径20m・高さ5mの赤城山古墳(23)の2基が現存している。町内では西豊田地区の仁江戸に所在する仁江戸古墳群及び安静地区の栗山に所在する城山古墳群を除けば、権現山遺跡周辺は比較的古墳が多く造られた地域である。

奈良・平安時代になると、分布図に示したほとんどの遺跡が成立していく。特徴的なことは、それ以前の遺跡は結城台地縁辺部に立地していたが、この時代になると台地東側に広がる鬼怒川低地にも遺跡が見られることである。それは奈良時代に行われた鬼怒川の河川改修が大きな要因と考えられ、低地の開発が進んで来たことがうかがわれる。当時の鬼怒川は低地内を大きく蛇行して流れおり、八町で突出し急激に東側に流路を変えている。権現山遺跡から東側800m足らずの前に鬼怒川が迫っていたのである。『続日本紀』の神護景雲2年(768)8月19日の条に鬼怒川の河川改修の記録があるが、その場所がこの地域と考えられている。改修後の河道跡は絶好の耕地になつたと考えられ、瀬戸井上遺跡(8)、瀬戸井下遺跡(9)、沼端前遺跡(11)や紫山遺跡(24)など奈良・平安時代の遺跡が旧河道に沿って立地している。

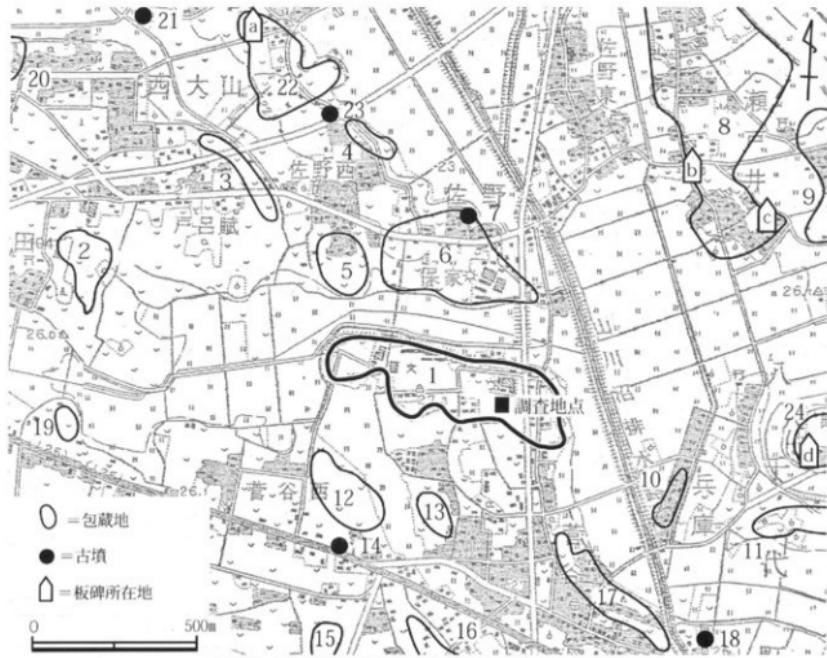
中世になると、権現山遺跡をはじめ周辺でもカワラケや内耳上器などの中世の遺物を出土する遺跡は少なくない。権現山遺跡では今回の発掘調査で町内で初めて地下式坑が確認されている。鬼怒川の旧河道路跡で南北西制を囲まれた紫山遺跡(24)は、南北朝時代、南朝方の駒城(下妻市)を攻略するため築かれた砦の一つである八丁日砦跡と推定されている。この地にある新長谷寺は、寺伝によると鎌倉時代の創建と伝えられ、本尊の木造十一面觀音立像は内削り部の墨書きから、南北朝時代貞和6年(1350)の制作であることが確認されている。また、新長谷寺には弘安6年(1283)銘の町内最古の板碑(d)や鎌倉時代と推定される2基の五輪塔が残されている。その他、周辺でも鎌倉時代から室町時代の板碑(a・b・c)が伝えられている。戦国期の八千代地方は、結城氏や下妻の多賀谷氏の勢力圏に入り、町内でも和歌城や太田城が築かれている。

江戸時代の享保年間に始まった新田開発により、八千代地方でも飯沼の新田開発をはじめ、権現山遺跡周辺の北沼や山川沼など鬼怒川低地の諸沼も開発が行われ、徐々に水田地帯へと姿を変えていった。

*主な参考文献

- ・八千代町史編さん委員会『八千代町史 通史編』1987
- ・八千代町史編さん委員会『八千代町史 資料編 考古1』1988
- ・八千代町教育委員会『八千代町遺跡地図』2003

(山野井)



第5図 周辺遺跡分布図(八代町道路図 1/25000を縮小して使用)

表1 周辺遺跡一覧表

*番号は第5図「周辺遺跡分布図」に対応する。

番号	遺跡名	所在	概要	遺跡番号
1	梅島山遺跡	青谷 梅島山	本古墳古道跡。	114
2	御所山遺跡	佐野 佐野山	奈良平安時代の土師器出土。	104
3	戸呂賦東遺跡	佐野 戸呂賦東	奈良平安時代の土師器出土。	105
4	赤保家遺跡	佐野 赤保家	古墳～奈良平安時代の遺跡。	106
5	佐野山山遺跡	佐野 丸山	奈良平安時代の遺跡。	107
6	山中駒城小学校 校庭遺跡	佐野 古駒城	一派溝跡、目2の側面で7個 紀代の柱礎等確認。土師器・ 瓦器等の土器、縄文前期土器等、 板碑等出土。	108
7	山之神古墳	佐野 赤保家	高さ4mの円墳とされる。湮滅。	109
8	瀬川上遺跡	瀬川上 瀬川下	自然堤防上に立地。奈良平安時 代の土師器、須恵器、中世の 陶器が出土する。	110
9	瀬川下遺跡	瀬川下 香取山	自然堤防上に立地。奈良平安時 代の土師器、須恵器、中世の 陶器が出土する。	111
10	吉木山遺跡	大熊 吉木山	近世の遺跡。	112
11	沼畠前遺跡	青谷 沼畠前	奈良平安時代・中世の複合遺跡。	113
12	向寺前遺跡	青谷 向寺前	縄文時代・奈良平安時代・中世 の複合遺跡。土師器等出土。	115
13	伊勢山山遺跡	青谷 伊勢山	縄文時代・奈良平安時代の複合 遺跡。	116
14	菅谷古墳	青谷 山上	高さ5mの円墳とさ れる。道路工事に際して、玉石 多数・人骨が出土。湮滅。	117
15	伊勢山中台遺跡	青谷 中台	奈良平安時代の土師器等出土。	118

16	御所山遺跡	青谷 岩町	奈良平安時代の土師器、須恵器・ 中世の土師器と陶器が出土する。 複合遺跡。	119
17	高野台遺跡	青谷 高野台	縄文時代・奈良平安時代・中世 の複合遺跡。	120
18	大神塚古墳	青谷 大神	径40m、高さ5mの円墳。	121
19	日岡本遺跡	青谷 日岡本	古墳時代・奈良平安時代の前縄文。	123
20	尼敷山西遺跡	西大山 尼敷山	縄文時代・奈良平安時代の複合 遺跡。	125
21	青石塚古墳	西大山 青石塚	径25m、高さ6mの円墳。湮滅。	126
22	大山通南遺跡	西大山 大山通南	縄文文化、後期の土器やミミズク 形土偶・土師器・須恵器等出土。 縄文時代・奈良平安時代・中世 の複合遺跡とされる。	127
23	赤城山古墳	佐野 赤城山	径20m、高さ5mの円墳。墳 丘一部削除。	128
24	堂山遺跡	八町 堂山	奈良平安時代・中世の遺跡。遺 跡内に新谷古寺が立地。14世 紀代の楓の立像を始め中世の最 茶器・選舉塔等伝来。	129
a	板碑所在地	村賀地内	弘永二年(1413年) 銘財介 院・寺子板碑。	
b	板碑所在地	瀬川下共原地内	15世紀代の阿弥陀・釋迦板 碑。	
c	板碑所在地	瀬川下共地内	弘安六年(1283) 銘阿弥陀・ 釋迦板碑。	
d	板碑所在地	八町 新設谷寺	弘安六年(1283) 銘阿弥陀・ 釋迦板碑。同所の他の板 碑5基は他所から移入。	

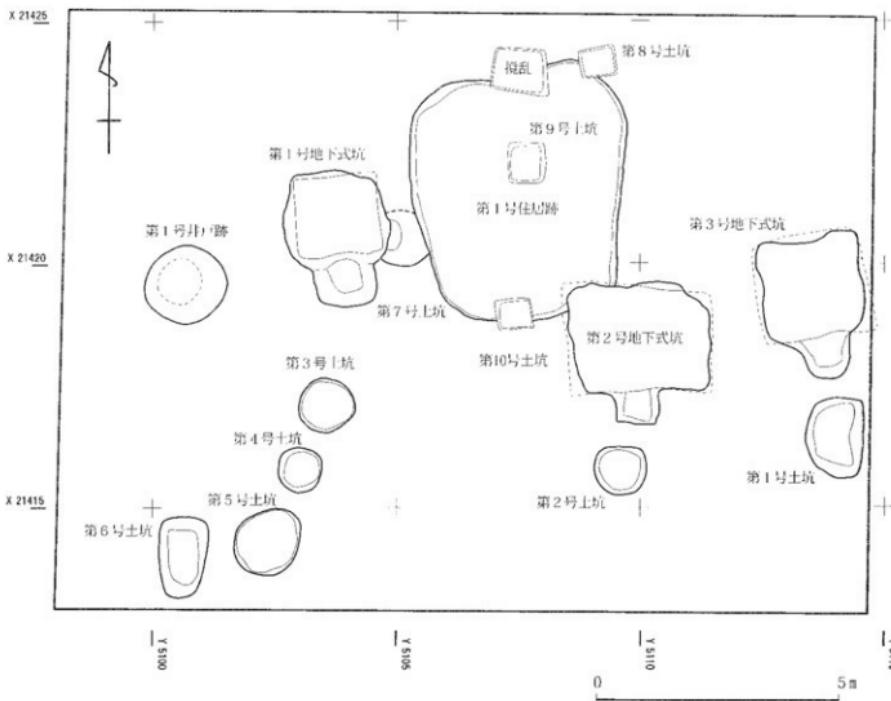
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 遺構の概要

発掘調査は約203m²の範囲を対象に実施した。確認作業中出土した遺物は、調査区の北寄り中央部、東南部、西南部に比較的集中して縄文土器片等が出土したが、1次の試掘・確認調査した地区と比べると出土量は非常に少なかった。また、後の住居跡の調査でも覆土の厚さが20cm足らずと薄いことから、調査区は後世の削平を受けていると思われる。

確認された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒（第1号住居跡）、中世の井戸跡1基、地下式坑3基、その他土坑10基である。第1号住居跡からは、試掘・確認調査において完形に近い深鉢形土器が出土している。地下式坑は3基とも、方形の地下室の南側に竪坑部を持っている。出土遺物はたいへん少なく、覆土内には縄文土器片が混入しているが、須恵器や上師質土器などが出土している。

1号住居跡を切っている第8号・第9号・第10号土坑は、覆土中に僅かに縄文土器片が混入していたが、黒色土の非常に柔らかい覆土で、同じく第1号住居跡を切っている明らかに近代以降に掘られた擾乱と同様の土であることから本報告から除外した。
(山野川)



第6図 発掘調査区全体図

第2節 繩文時代の遺構

第1号住居跡

位置 調査区の北寄り中央部に位置する。住居跡の北壁は搅乱及び第8号土坑、中央部は第9号土坑・南壁は第10号土坑、東南隅は第2号地下式坑に切られる。長軸方向は、ほぼ真北を示す。

規模・形状 長軸約5.0m、短軸約4.4m、深さ約15～20cm、隅丸の長方形を呈する。

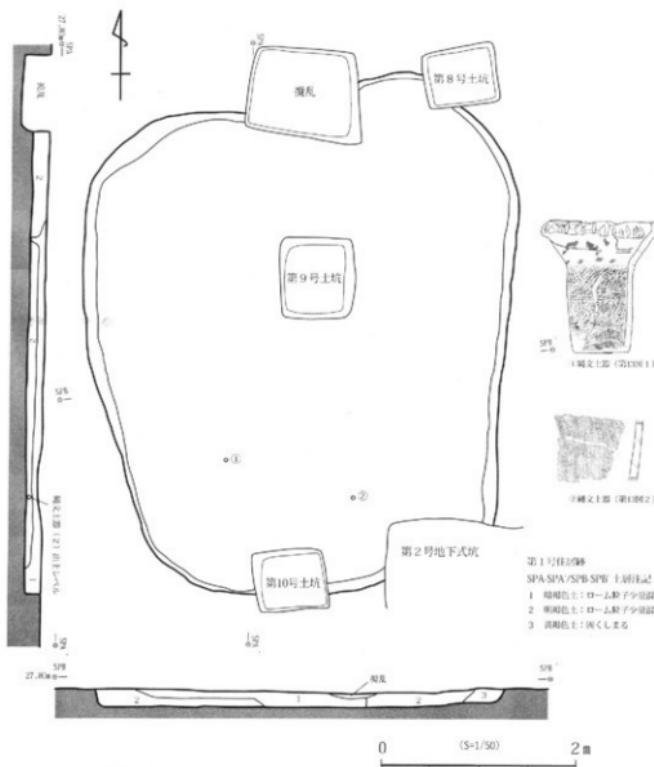
覆土 硬くしまった土で、土層は3層に分けられる。壁際の堆積状況から自然堆積と判断される。確認面から床面までの深さが浅いことから、後世の削平を受けていると思われる。

構造・施設 住居跡内には、炉跡や柱穴、壁溝、土坑などは特に認められなかった。床面は住居跡中央部から壁近くまで固くしまっているが、壁周辺はあまり硬化した面は見られない。

出土遺物 試掘・確認調査の際、住居跡の南西部で、床面から口縁部を西に向か横位の状態で完形に近い深鉢形土器（第13図1）が出土した。本調査では、覆土内から繩文土器片（第13図2～9）及び磨製石斧（第15図44）が1点出土したが、出土量は多くない。

時期 試掘・確認調査で床面から出土した深鉢形土器から、縄文時代中期後半の住居跡と判断される。

（山野井）



第7図 第1号住居跡実測図

第3節 中世の遺構

中世の遺構は、井戸跡1基、地下式坑3基を調査した。調査当初は黒色土を覆土とする円形あるいは楕円形の大形の土坑としていたが、調査の過程で井戸跡と地下式坑であることが確認された。特に第1号及び第2号地下式坑は、確認段階では竪坑部を把握できず横軸方向に半裁したので、南壁中央部に竪坑部の掘り込みを確認して地下式坑と判断できた。第3号地下式坑は、確認段階で地下室南側に突出した竪坑部が確認できたので、南北方向に半裁して調査した。

第1号井戸跡

位置 調査区の西寄り中央部に位置する。

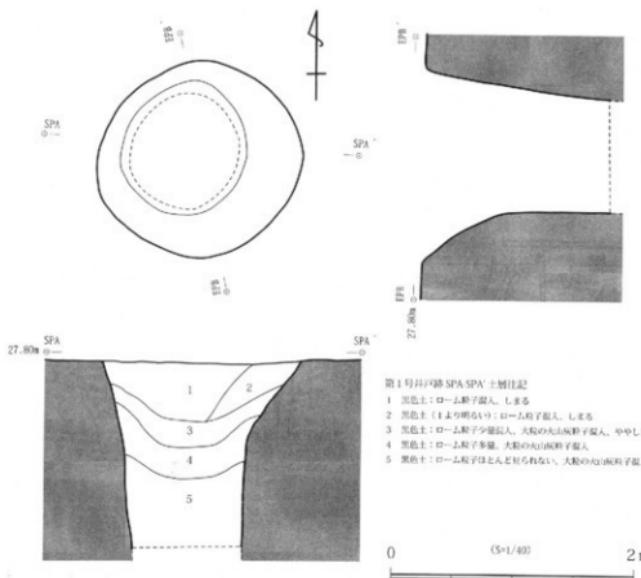
規模・形状 直径約1.6m～1.7mのほぼ円形を呈する。

覆土 調査では約1.6mの深さまで掘り下げる事ができたが、底面をピンボールで確認したところ、更に1m以上深いことが確認された。確認できた土層は5層で、いずれも黒色土を主体とする土である。

構造 井戸跡の断面形は、東南部の立ち上がりは深さ約60cmのところから約55°の傾斜で外側に開いているが、西侧は約75°の傾斜で急激に立ち上がる。それ以下は、ほぼ垂直に掘り下げられており、直径約1mの円形を呈している。

出土遺物 出土量は極めて少ない。覆土1層から4層まで少量の繩文土器片や小礫が混入している他、鉄製品（第18図17）や4層から磨製石斧（第15図45）が1点出土した。

時期 覆土中から出土した遺物からは遺構の時期を判断することはできないが、地下式坑と同様な黒色を呈する覆土の状況から、中世の地下式坑と同時期の遺構と推定される。



第8図 第1号井戸跡実測図

第1号地下式坑

位置 調査区中央部よりやや北西寄りに位置する。東壁で第7号土坑を切っている。堅坑部が南側にあり、軸方向はN=10°-Wを示す。

規模・形状 地下室はほぼ正方形を呈し、堅坑部は隅丸の方形を呈する。軸長約2.7m、地下室の奥行き約1.6m、横軸約1.7m、深さ約1.2mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。堅坑部の幅は約1.2m、奥行き約1.1mである。

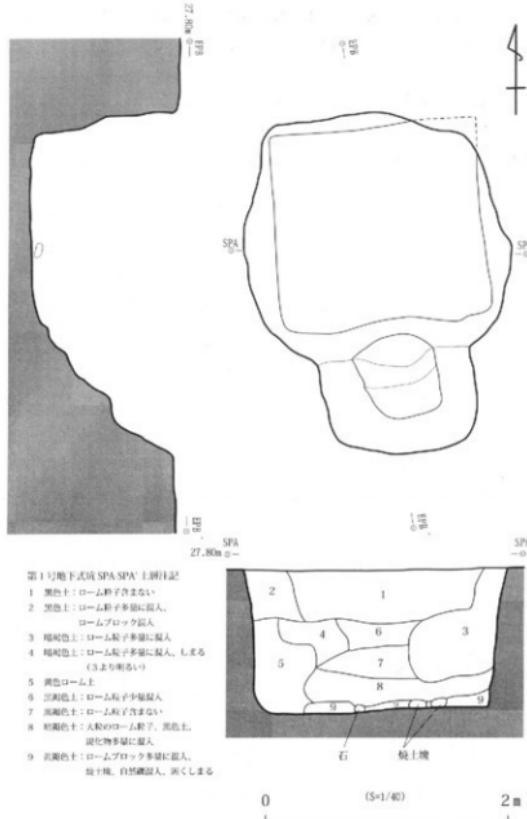
覆土 土層は横軸の断面を観察したが、9層に分けられる。1層、2層、及び6層から9層は黒色土主体の自然堆積、3層から5層はローム土、ロームを多量に含んだ土層で天井からの崩落土と考えられる。軸方向の土層は観察できなかったが、堅坑部の土層は黒色土の自然堆積であることから、堅坑部からの流入により6層まで堆積した後、地下室の天井が両横から崩落したと推定される。最下層の9層は固くしまり、ロームブロック及び長さ約20cm代の大型の焼土塊が多数底面に認められた。その上層の8層は、多量の炭化物が混入していた。

構造・施設 堅坑部は2段

の階段状を呈する。地下室の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東隅部の壁は、底面から高さ約1mのところで内側に約10cmから15cmほど迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室室内には土坑などは認められなかった。

出土遺物 出土量は少なく、覆土全体に縄文土器片や小礫が混入している他、縄文時代の石皿（第15図49）、覆土下層から須恵器短頸壺の胸部片（第17図）、土師質土器の小皿（第18図1）、内耳土器口縁部（第18図2）、底部（第18図3）が出土した。その他、地下室底面中央部及び東壁際下層から自然礫が出土した。

時期 出土した中世遺物の時期から、15世紀後半から16世紀にかけての遺構と推定される。



第9図 第1号地下式坑実測図

第2号地下式坑

位置 調査区中央部よりやや南東寄りに位置する。北西隅で第1号住居跡を切っている。竪坑部が南側にあり、軸方向はほぼ真北を示す。

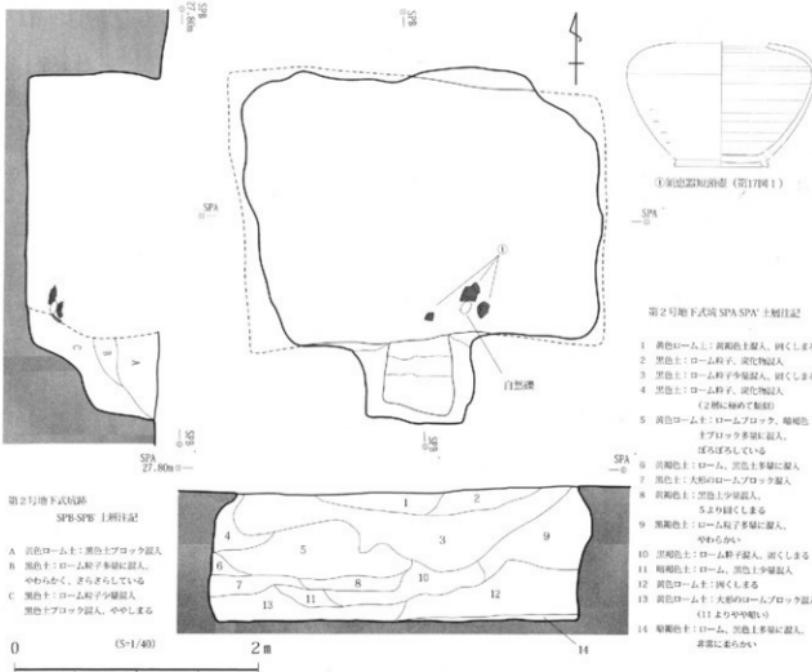
規模・形状 地下室は横長方形を呈し、竪坑部は方形を呈する。軸長約2.9m、地下室の奥行き約2.2m、横軸約3.0m、深さ約1.1mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。竪坑部の幅は約0.9m、奥行き約0.7mである。

覆土 土層は横軸の断面を観察したが、14層に分けられる。地下室の堆積状況は、竪坑部から流入したと考えられる最下層（14層）が薄く底面に堆積し、その後天井部（12・13層）が剥がれ落ち、その上に竪坑部からの流入（7～11層）があり、最終的に天井（5・6層）が崩落して埋没したと推定される。竪坑部では黒色土（B・C層）の流入の後、最上層（A層）は竪坑部付近の天井の崩落によりロームで塞がれたような堆積状況である。

構造・施設 竪坑部は1段の階段状を呈する。地下室の底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。地下室底面から高さ約90cmのところで周囲の壁が約20cmから30cmほど内側に迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室内には土坑などは認められなかった。

出土遺物 出土量は少なく、覆土全体に繩文土器片や小礫が混入し、繩文時代の石斧（第15図46）、磨石（第15図47）が出土している。竪坑部から流入した黒色土からは大型の須恵器片が一括して出土しており、短頸壺（第17図1）が復元された。中世の遺物（第18図4～11・16）としては、覆土内から甕や茶碗などの陶器片、小皿や鍋などの土師質土器、釘と思われる鉄製品、砥石などが出土した。

時期 出土した中世遺物の時期から、15世紀後半から16世紀にかけての遺構と推定される。



第10図 第2号地下式坑実測図

第3号地下式坑

位置 調査区の東端中央部に位置する。竪坑部が南側にあり、軸方向はN-20°-Wを示す。

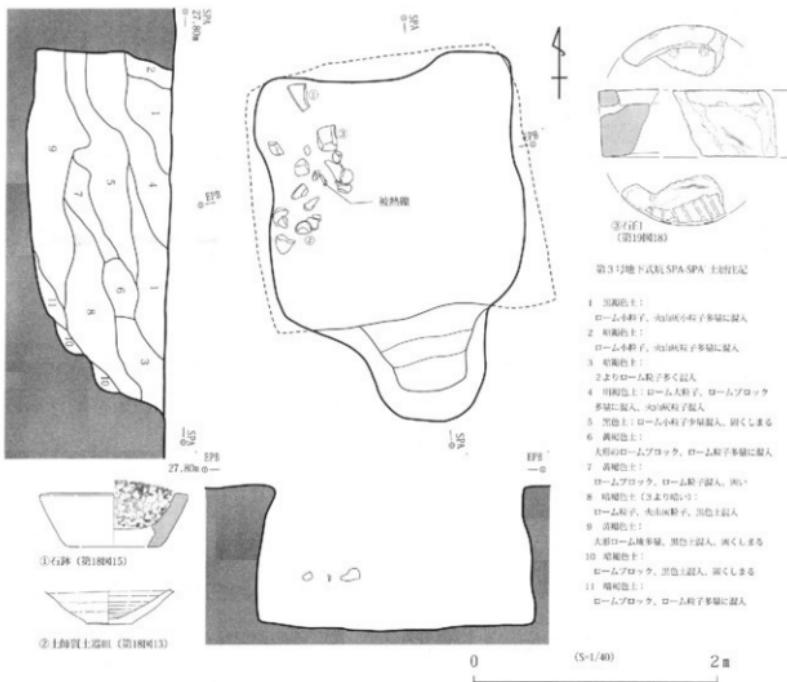
規模・形状 地下室はほぼ正方形を呈し、竪坑部は楕円形を呈する。軸長約3.0m、地下室の奥行き約2.1m、横軸約2.3m、深さ約1.2mである。地下室の高さは、天井が崩落しているため不明である。竪坑部の幅は約1.0m、奥行き約0.9mである。

覆土 土層は縦軸の断面の観察で11層に分けられる。堆積状況は、竪坑部から流入した自然堆積の状況を呈するが、地下室の底面には天井から崩落したと考えられる崩れたローム層（9層）が約30cmから40cmと厚く堆積している。また4・6・7層もロームブロックを多量に含んだ層であることから、数度にわたって天井が崩落したものと推定される。この崩落土（6・7・9層）の上に堆積した黒色土（5層）から大型の礫が多量に出土した。

構造・施設 竪坑部は2段の階段状を呈する。地下室の底面はほぼ平坦であるが、中央に向かってなだらかに窪んでいる。壁は内側に緩やかに傾斜しながら立ち上がる。第2号地下式坑と同様に、地下室底面から高さ約90cmのところで周囲の壁が約20cmから30cmほど内側に迫り出しており、天井につながる状況が確認された。その他、地下室には土坑などは認められなかった。

出土遺物 出土量は少なく、覆土全体に繩文土器片や小礫が混入している。黒色土（5層）から一括して多量に出土した大型の礫に混じり、繩文時代の石皿（第15図48）や石棒（第16図50）、土師質土器の皿（第18図13）や鏡（第18図14）、石鉢（第18図15）や石臼（第19図18）などが出土した。

時期 出土した中世遺物の時期から、15世紀後半から16世紀にかけての遺構と推定される。（山野井）



第3号地下式坑実測図

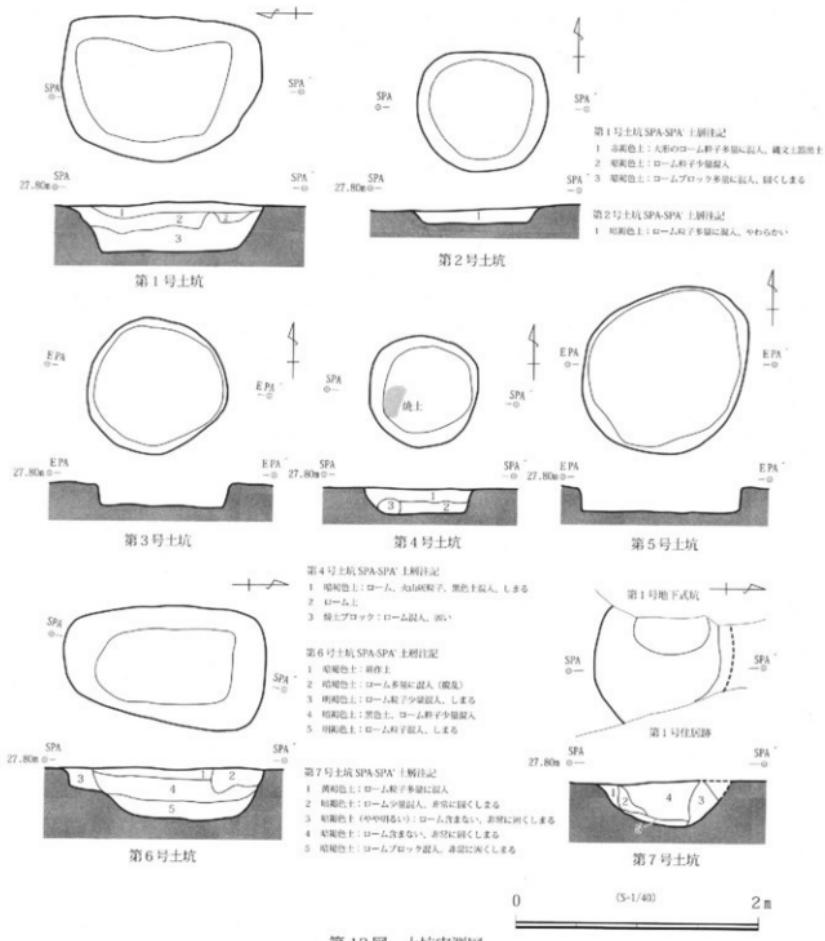
- 1 破壊土:
- 2 ローム小粒子、丸山灰小粒子多量に混入
- 3 相模土:
- 4 ローム小粒子、丸山灰小粒子多量に混入
- 5 黒褐色土:
- 6 よりローム粒子多く混入
- 7 田舎土:
- 8 大量のロームブロック、ローム粒子多量に混入
- 9 黒褐色土:
- 10 岐阜土:
- 11 破壊土:
- 12 ロームブロック、ローム粒子多量に混入
- 13 黒褐色土:
- 14 ロームブロック、黑色土混入、固くしまる
- 15 黒褐色土:
- 16 大量のロームブロック、黑色土混入、固くしまる
- 17 黒褐色土:
- 18 ロームブロック、黑色土混入、固くしまる
- 19 黒褐色土:
- 20 ロームブロック、黑色土混入、固くしまる
- 21 黒褐色土:
- 22 ロームブロック、ローム粒子多量に混入

第4節 その他の遺構

土坑

土坑は7基確認したが、覆土中から少量の繩文土器片等が出土した程度で、時期、性格は不明である。

第1号土坑は、長軸約1.6m、短軸約1.2m、深さ約40cmの楕円形を呈する。1層・2層から繩文土器片が他の土坑より比較的多く出土した。第2号土坑から第5号土坑は、直径約0.9mから1.3m、深さ約10cmから20cmと浅い土坑で、円形を呈する。第4号土坑の底面に焼土塊が認められた。第6号土坑は、長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約40cmの楕円形を呈する。第7号土坑は、直径約1.1m、深さ約35cmで円形を呈する。東側を第1号住居跡、西側を第1号地下式坑に切られている。他の土坑と比べ、覆土は非常に固くしまっている。
 (山野井)



第5節 繩文時代の遺物

縄文時代の遺物（第13図～第16図）は、住居跡内ほか殆どが地下式坑の埋没土中からの出土であった。時期は縄文時代中期前葉から中葉・後葉が主体である。

第13図1～9は第1号住居跡出土のもの。1は住居跡床面直上出土で、調査区のなかで最も遺存状態の良好なものである。地文に単節R Lを充填し、二重の沈線を横位に押し引きする。垂下する一方は渦巻き文を構成。口辺部は「く」の字状で、縱の条線を施文する。大木8a式と考えられる。

2は深鉢の胸部片。3は頸部で、単節R L充填、隆帯脇に一列の沈線。5は脚部片。縦の磨消縄文帶で、加曾利E 3式とみられる。6～9は阿玉台式と考えられる一群。6は口辺直下に横方向に一列の角押文を施文。

10～22が第3号地下式坑出土のもの。10・11は勝坂系の土器群。10は爪形文の降帶を口辺付近上部に貼付する。11は脚部片。隆帯によって逆三角形文を構成、隆帯脇に幅広瓜形文を施文する。12は口縁部。無文地で、横位に二重沈線を施文する。13も勝坂系と思われる一群で、口縁部直下に渦巻き状隆帯を貼付し、隆帯脇に一列の角押文を施文する。14～16は加曾利E 3式からE 4ないしは大木式と考えられるもの。14は口縁部で、縱横凹凸画の磨消縄文を施文する。15・16も磨消縄文帯。17は口縁部で、口縁区画文を持つ。加曾利E 2式からE 3式と考えられる。19・20も磨消縄文を施文。磨消縄文の幅が広く、楕円形を呈してより加曾利E 4式ないし大木9a式期の並行と思われる。21も加曾利E式。無節Lで、横方向の沈線を押し引きし区画。22は単節L Rで、口縁部直下に横方向の沈線を押し引き。

23は第1号地下式坑から出土した脚部片。無節Lで、縱位の蛇行沈線を垂下。

第14図24・27～35までは第2号地下式坑出土のもの。24は加曾利E 4式と思われる深鉢で、単節R Lで施文したのち、縦位の楕円区画の磨消帯を表す。区画文の間にS字状沈線を描く。大木9a式並行であろうか。

28は阿玉台式の把手部分。胸部は沈線による文様構成を主体とする。把手の上面に刻みを施文し、沈線を幾重に押し引きする。ミミズクをデフォルメしたもの。29～30は加曾利E 3式からE 4式と思われる。31は阿玉台式の浅鉢の口縁部、朱の痕跡が見られる。32～33は加曾利F 3式。34は阿玉台IV式の脚部片。35は加曾利E式の脚部片で、単節R Lを施文。磨消縄文を表す。

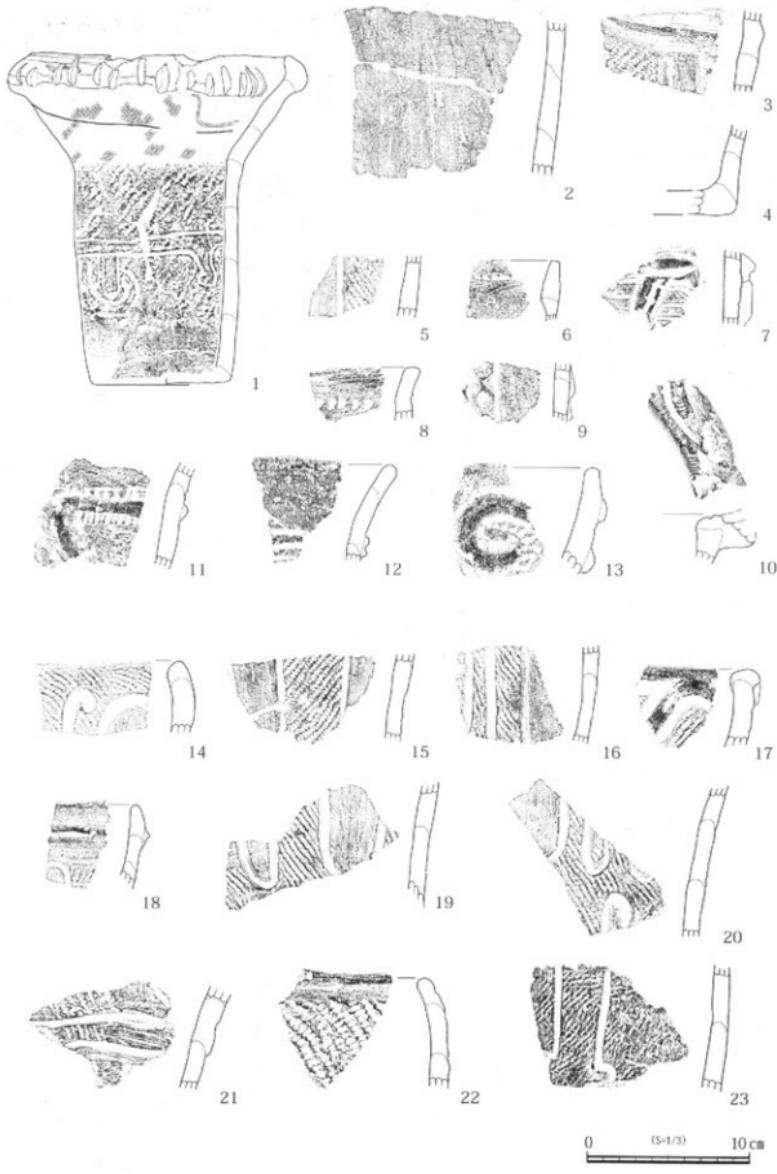
第14図25・36～39、第15図40～43の遺物は試掘・確認調査（1次）出土のもの。25は5トレンチから出土した阿玉台式の深鉢。単節L Rを施文した後、頸部に横方向の一重沈線を押し引きし、縦位の沈線ほか渦巻きを構成する。縄文は口縁部まで施文する。阿玉台IV式である。36は3トレンチ出土で加曾利E式の浅鉢。口縁部に横方向の沈線によって楕円区画を構成し、区画と区画の間に一条の沈線を垂下。

37～41・43は5トレンチ出土。37～38は加曾利E式の口縁部片。37は口縁直下に縱の刻みが見られ、以下、条線を垂下。38は加曾利E 3式の口縁部で、単節R Lを施文したのち、降帯による渦巻き文を構成する。39は阿玉台式の浅鉢。40は加曾利E式の口縁部。単節L Rを施文したのち、隆帯によるクランク文を構成。加曾利E 3式。41は阿玉台IV式の口縁部。単節R Lを施文し、隆帯による三角形の文様構成。42～43は加曾利E式と思われる深鉢の底部片。

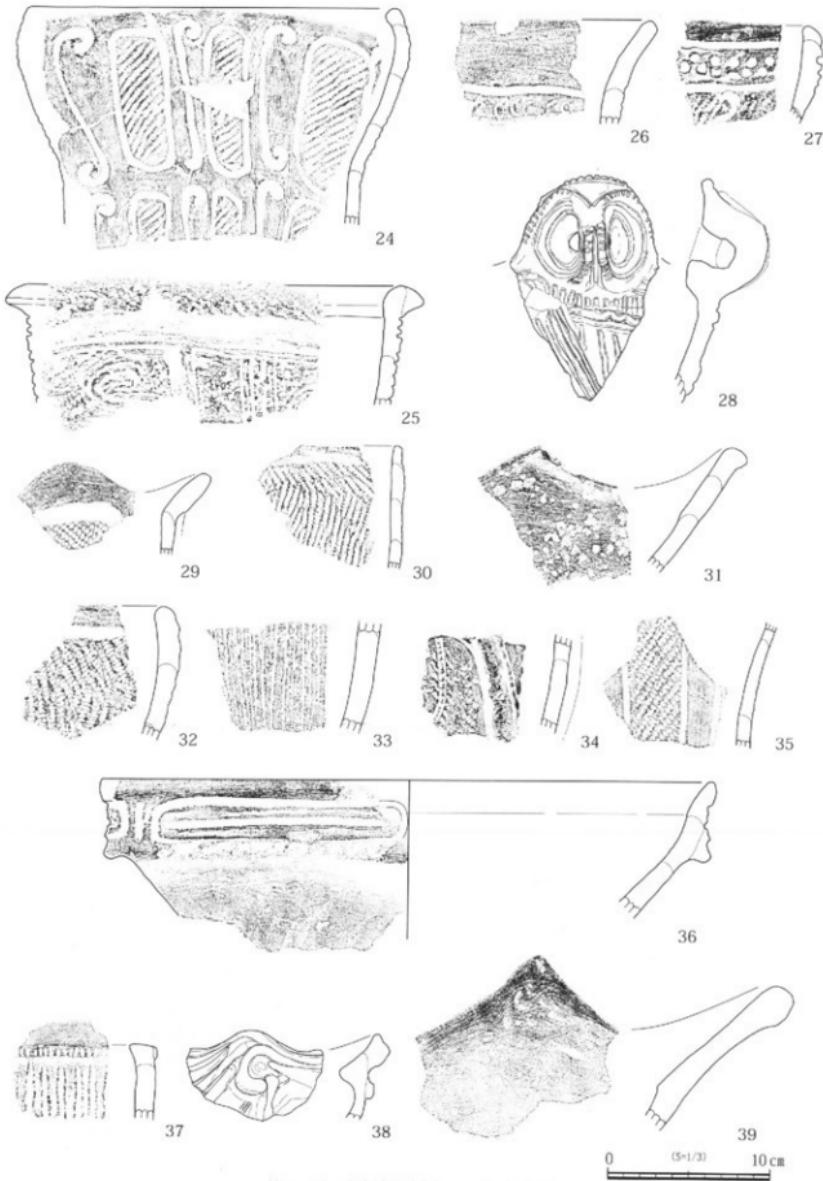
第15図44～49、第16図50は石器類である。44は住居跡出土の安山岩製磨製石斧で、刃部の一部が欠損する。

45は第1号井戸跡出土で、蛇紋岩製の磨製石斧。表裏はよく研磨される。46～47は第2号地下式坑出土で46は蛇紋岩製磨製石斧。刃部を敲打し打製石斧として再利用したものとみられる。47は磨石。石材は安山岩で、握り拳ほどの大きさに3面の使用面がみられる。48・50は第3号地下式坑出土のもの。48は石皿。円石に使用している。安山岩製。50は安山岩製の大型石棒。両端部は破損するが、側面2か所に対向して穿孔がみられる。

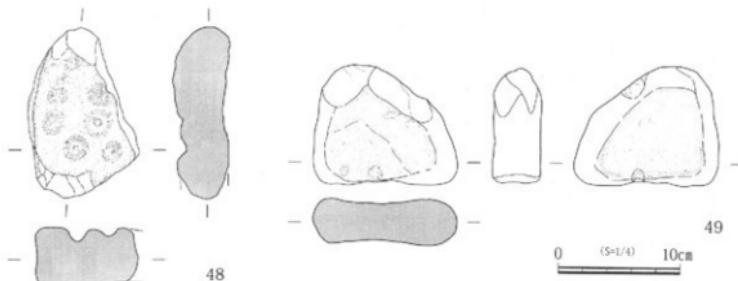
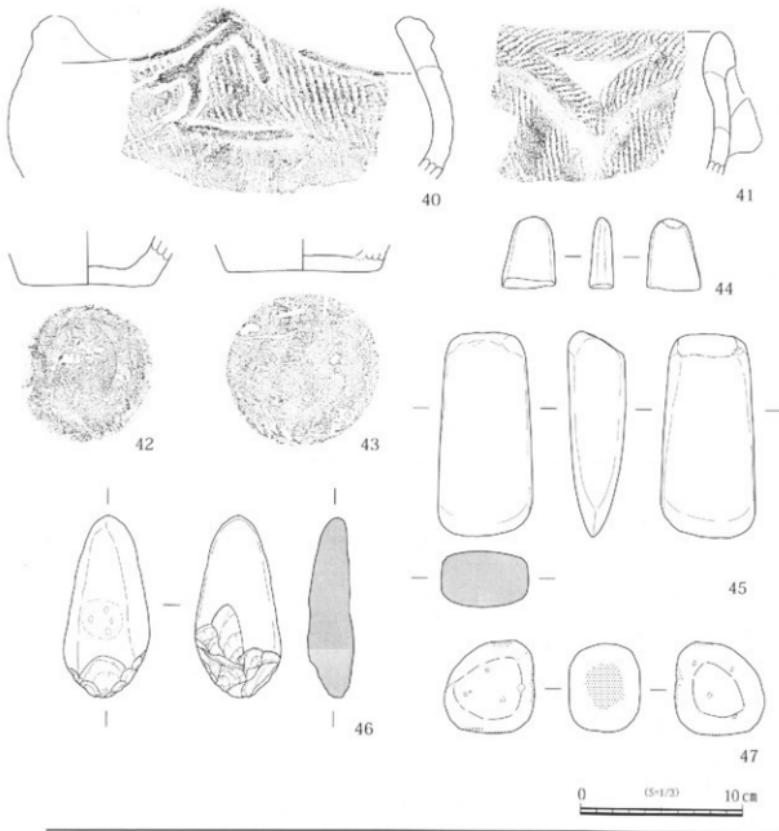
（新垣）



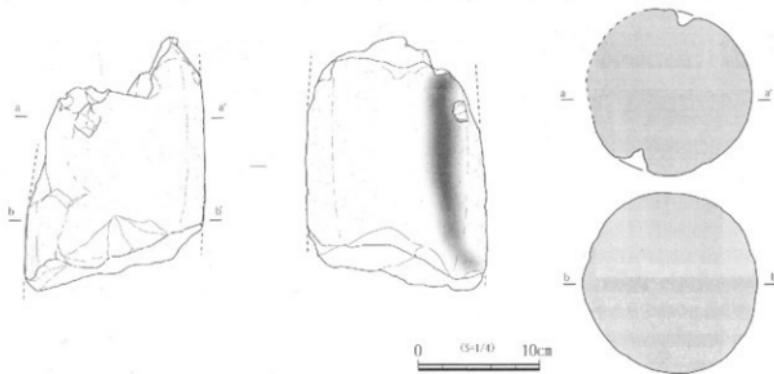
第13図 出土遺物実測図1（縄文時代）



第14図 出土遺物実測図2（縄文時代）



第15図 出土遺物実測図3（縄文時代）



第16図 出土遺物実測図4（縄文時代）

50

表2：出土遺物観察表（縄文時代遺物）

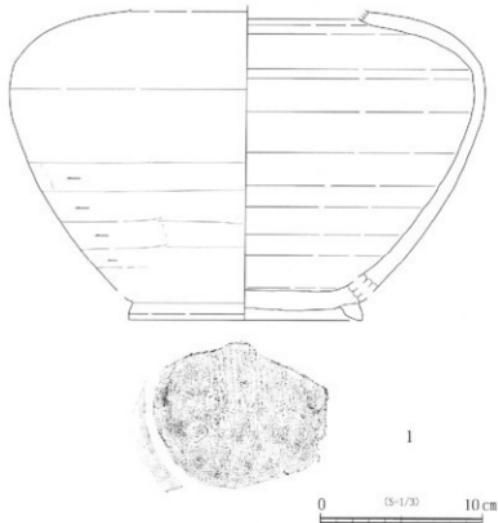
本表の凡例：「法量」の単位はcm、重畠はgである。なお、突起を持つ縄文土器の「U仔」は、突起上端部ではなく口唇部分で測定した。

出土位置の項では以下の通り略称を用いる。[1号住跡→住居 地下式床→地下 1号井戸跡→井戸 試掘・確認調査(1次)トレンチ→トレ]

拂因番号	出土 位置	名稱・ 基盤	型式	法量	胎土	色調	焼成	縄文の特徴	残存部 残存率	注記番号	備考
第13回 1	住居	縄文土器 深鉢	大木Ba式	口径 15.1 器高 20.1 底径 8.4	長石・雲母	にぶい褐色 (10YR4/3)	良好	単筋LR。先端後、二重沈縫を横位に押引き。	口縁部 ～底部 1/2	IT-1	
第13回 2	住居	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	砂粒・ 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	縫合ナデ。無文地。内面は斜位ナデ。	縫合部	住D-3	
第13回 3	住居	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	砂粒	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好	内面縫合ナデ。外面、单筋LR。縫合部・舟形帯を区画文を 表す。	縫合部	住C	
第13回 4	住居	縄文土器 深鉢	—	—	長石・ 金雲母	褐色 (7.5YR6/6)	良好	無文地。内面斜位ナデ。外面縫合ナデ。	底部	住ベルト	
第13回 5	住居	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	長石・白雲 母・石英・ 輝石	明赤褐色 (SYR5/6)	良好	単筋LR。縫合部は舟形帶。内面縫合ナデ。	縫合部	住D-1	
第13回 6	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	—	長石・ 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	角縫合工具による押引き。内面は丁寧なナデ。	口縫合部	住上	
第13回 7	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	—	長石・ 砂粒	明赤褐色 (SYR5/6)	良好	無文。横筋・次縫による区画。隆脊貼付。内面は斜位の 丁寧なナデ。	縫合部	住上	
第13回 8	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	—	砂粒・長石・ 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好	内外面ともに横ナデ。縫合部・舟形帯による施文。	口縫合部	住B	
第13回 9	住居	縄文土器 深鉢	阿玉台式	—	長石・ 赤色粒	黒褐色 (10YR3/2)	良好	隆脊貼付。内面は継・複ナデ。	縫合部	住上	
第13回 10	3号 地下	縄文土器 深鉢	縛板系	—	長石・ 砂粒	褐色 (10YR6/6)	良好	爪形文の隆脊貼付。内面縫合ナデ。	口縫合部	地3-3	
第13回 11	3号 地下	縄文土器 深鉢	縛板系	—	長石・ 雲母	褐色 (10YR3/2)	良好	隆脊貼付に一列の幅広角押文を押引き。内面縫合ナデ。	縫合部	地3-6	
第13回 12	3号 地下	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	長石・ 金雲母	明赤褐色 (SYR5/6)	良好	無文。縫合の二重沈縫。内面縫合ナデ。	口縫合部	地3-5	
第13回 13	3号 地下	縄文土器 深鉢	縛板系	—	砂粒・長石・ 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR5/6)	良好	湯呑伏隆基縫に二条のベン先状工具押引き。内面は摩耗・蓄積し模様は不明。	口縫合部	地3-2	
第13回 14	3号 地下	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	長石	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好	単筋LR。縫合部・舟形帯を墨下。	口縫合部	地3-5	
第13回 15	3号 地下	縄文土器 深鉢	加賀利E式	—	長石・ 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好	単筋RL。幅広塵消文を構成。内面斜位縫合ナデ。	縫合部	地3-3	

第13回 10	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒・長石 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好 無焼。端部の沈線重下。	頭部 地3-3	
第13回 17	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒・石英 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	良好 無焼し、縦帶付付。	口縁部 地3-2	
第13回 18	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 雲母	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好 単面LR。口縁に微燒帶。内面横ナデ。	口縁部 地3-1	
第13回 19	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒・長石 雲母	にぶい黄褐色 (10YR4/2)	良好 無焼し。唇消済によって焼内区画を構成。内面横ナデ。	頭部 地3-3	
第13回 20	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒 赤色粒	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好 無焼し。唇消しを構成。	頭部 地3-5	
第13回 21	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 赤色粒	灰褐色 (10YR5/4)	良好 無焼し。横帯二重沈線を押引き。内面横ナデ。	頭部 地3-1	
第13回 22	3号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 雲母	褐色 (7SYR8/6)	良好 単面LR。内面横ナデ。	口縁部 地3-2	
第13回 23	1号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 雲母	明黄褐色 (10YR7/6)	良好 無焼跡。平行沈線による区画文構成。内面横ナデ。	頭部 地1-6	
第14回 24	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	口径 (22.5) 砂粒	明黄褐色 (7SYR5/6)	良好 単面LR。唇消済による焼内区画文を構成。内面は強ナデ。	口縁部 地2-2	
第14回 25	5号 2トレイ 地下 深鉢	阿玉台式	口径 (23.1) 長石	褐色 (10YR3/1)	良好 無焼LR。重層の沈線押引き。内面横ナデ。	口縁部 ST-2	
第14回 26	1号 土坑 深鉢	加曾利式	砂粒 長石	にぶい黄褐色 (10YR2/1)	良好 単面LRを完焼。内面は強ナデ。	口縁部 土1-3	
第14回 27	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 雲母	明黄褐色 (7SYR2/4)	良好 無焼LR。平行沈線による区画文構成。	口縁部 地2-4	
第14回 28	2号 地下 深鉢	阿玉台式	集雲母 長石	明黄褐色 (5SYR2/4)	良好 複位の朱焼。唇帯による三角区画文を構成。把手の部分を大きく凹凸をつけて、縦帶上には刻文を施文。	口縁部 地2-1	
第14回 29	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒 長石	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好 単面LR。沈線による文捺捺痕区画。内面横ナデ。	口縁部 地2-4	
第14回 30	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 金雲母	にぶい黄褐色 (7SYR3/4)	良好 口縁部に単面LRを充焼し、上半は単面LRを充焼。内面横ナデ。	口縁部 地2-2	
第14回 31	2号 地下 深鉢	阿玉台式	長石 金雲母	にぶい黄褐色 (7SYR5/4)	良好 内外面ともに黒文。横ナデ。	口縁部 地2-3	
第14回 32	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒 長石	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好 単面LR横・斜位旋転で施文。内面斜位のナデ。	口縁部 地2-7	
第14回 33	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	長石 砂粒	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	良好 複位の沈(条)移。内面横ナデ。	頭部 地2-2	
第14回 34	2号 地下 深鉢	純文土器 阿玉台式	長石 金雲母	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	良好 複位LR。唇帶縦に角舟文の沈線押しこ引き。内面は縦・斜位のナデ。	頭部 地2-8	
第14回 35	2号 地下 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒 長石	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好 単面LR。幅広底消済を構成。内面は底ナデ。	頭部 地2-4	
第14回 36	3号 土坑 1トレイ	純文土器 加曾利式	口径 (37.4) 砂粒・雲母	灰石・石英 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好 口縁に横位の縦帶を貼付。沈線による押引き文によって焼内区画文構成。内面横ナデ。	口縁部 ST-2
第14回 37	5号 2トレイ 深鉢	純文土器 加曾利式	砂粒 長石	黑褐色 (7SYR2/2)	良好 横位縦條を墨下。口縁に微焼帶を貼付し斜文を施文。内面横ナデ。	口縁部 ST北サブ	
第14回 38	5号 2トレイ 深鉢	純文土器 加曾利式	長石・砂粒 雲母	褐色 (7SYR6/6)	良好 口縁に渦巻底消済を貼付。底帯縦は一条の沈線押引き。	口縁部 ST北サブ	
第14回 39	5号 2トレイ 深鉢	阿玉台式	砂粒・長石 雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好 内外面ともに黒文。燕文。	口縁部 ST北サブ	
第14回 40	5号 1トレイ 深鉢	純文土器 加曾利式	口径 (29.5) 砂粒	灰石・長石 石英	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好 唇帯による焼内区画文を構成。唇帯縦には一条の沈線を押引き。	口縁部 ST北サブ
第14回 41	5号 1トレイ 深鉢	阿玉台式	砂粒 砂粒	褐色 (7SYR6/6)	良好 単面LR。横・斜位回転。口縁に逆三角形底消済貼付。内面横ナデ。	口縁部 ST-2	
第14回 42	3号 1トレイ 深鉢	純文土器 加曾利式	底径 7.9 長石・雲母	にぶい黄褐色 (7SYR8/6)	良好 黒文。内外面周にナデ付け。外側は脇下部を横ナデ。底部はナデ。	底部 3T-2	
第14回 43	5号 1トレイ 深鉢	純文土器 加曾利式	底径 9.0 長石・雲母	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好 黒文。内外面周にナデ付け。外側は脇下部を横ナデ。底部はナデ。	底部 ST北サブ	

因版番号	出土位置	名称種別	石材	法量	特徴	残存部残存率	注記番号	備考
第15回 44	住居地下	石器 磨製石斧	安山岩	長さ4.4/ 幅3.4/ 厚さ1.5	表面研磨。基部端部一部失欠。刃部失欠。	基部 1/2	住-C	
第15回 45	井戸地下	石器 磨製石斧	蛇紋岩	長さ12.5/ 幅5.8/ 厚さ3.5/ 重量450	表面研磨。基部端部一部摩滅か。	ほぼ 完存	井1	4層出土
第15回 46	地下	石器 磨製石斧	蛇紋岩	長さ11.2/ 幅5.3/ 厚さ2.9/ 重量240	表面研磨。表面の一帯に剥離痕跡。刃部を敲打し、打製石斧として再利用する。	完存	地2-4	
第15回 47	2号地下	石器 磨石	安山岩	長さ5.4/ 幅5.5/ 厚さ4.4/ 重量210	全面研磨して使い込む。特に三側面に主要な磨面認める。	完存	地2-2	
第15回 48	3号地下	石器 石皿鉢	安山岩	長さ14.0/ 幅9.2/ 厚さ4.7	表面に複数の後使用の凹み。(ほみ石として使用)	側縁部 の一部	地3-7	5層出土
第15回 49	1号地下	石器 石皿鉢	安山岩	長さ11.8/ 幅9.8/ 厚さ3.9	二側面に深い凹面を作り出す。一部に使用痕のくぼみを認める。	破片	地1-7	
第16回 50	3号地下	石製品 石棒	安山岩	長さ20.9/ 幅15.0	側面研磨。両端部破損。側面2ヶ所に対向して穿孔あり。焼付着。穿孔および焼は後世の復原とみられる。	破片	地3-3	5層出土



第17図 出土遺物実測図5（古代）

第6節 古代の遺物

第17図1は第2号地下式坑から出土した須恵器の短頸壺である。同一個体であると考えられる破片も第1号地下式坑から出土している。法量はすべて復元値になるが、最大径が29.2cm、高台径が14.4cmをはかる。器形の特徴としては、肩部が強く張り、最大径をはかる位置が比較的高い。また体部上半と内側底面に、灰白色の自然釉が付着している。内側の頸部根元付近と下部に比較的強いクロナデの痕跡が認められる。胎土は緻密で、1mm前後の白色粒と、さらに微細な黒色粒が少量認められる。これらの特徴から生産地は東海地方と推測され、年代については、器形の特徴から折戸10号窯跡～井ヶ谷78号窯跡段階と考えられる。

(及川)

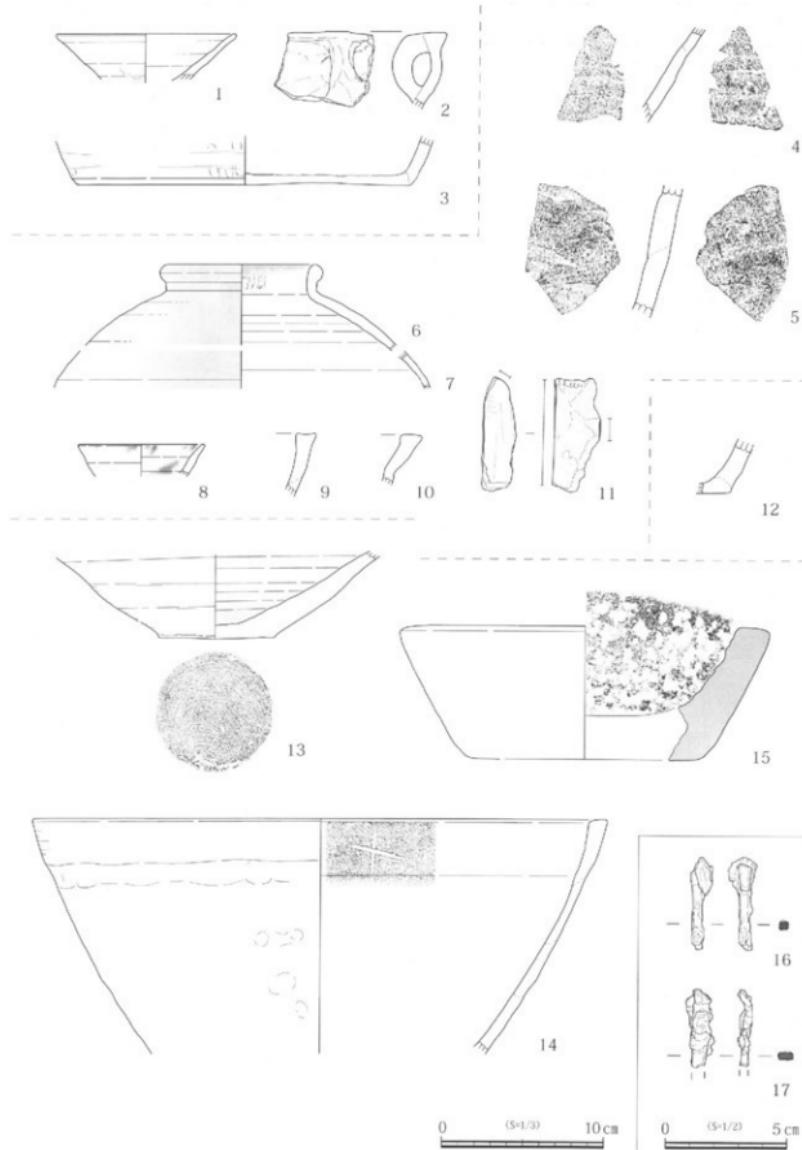
第7節 中世の遺物

中世の遺物は、在地産の土器類・国産の陶器類に加え、鉄製品・石製品が出土している。

第18図1～3は第1号地下式坑から出土した。1は薄手・硬質の土師質土器小皿であり、焼成は良好ながら外面に霜降り状の剥離が確認される。外面下位には最終調整に伴うな上げ痕跡が残る。

2・3は土師質土器鍋の口縁部（内耳部遺存）と底部の破片であるが、同一個体か否かは判断がつかない。底部内面は器面剥離が著しい。3の胎土には、金雲母が多量に含まれる。

第18図4～11および16は第2号地下式坑から出土した。4は常滑系陶器器口鉢1類の体部上位の破片とみられ、還元した胎土である。5は常滑系陶器縁の胸部の小破片である。砂粒をやや多く含む胎土である。6は古瀬戸系陶器の茶壺（祖母懐茶壺）の口縁部・肩部の破片である。口縁部は玉縁状に收め、短い頸部から撫で肩ぎみに胸部の広がりに移行する。外面及び口縁部内面には鉄釉を全面に施釉するが、部分的に釉薬の発泡が認められる。また、



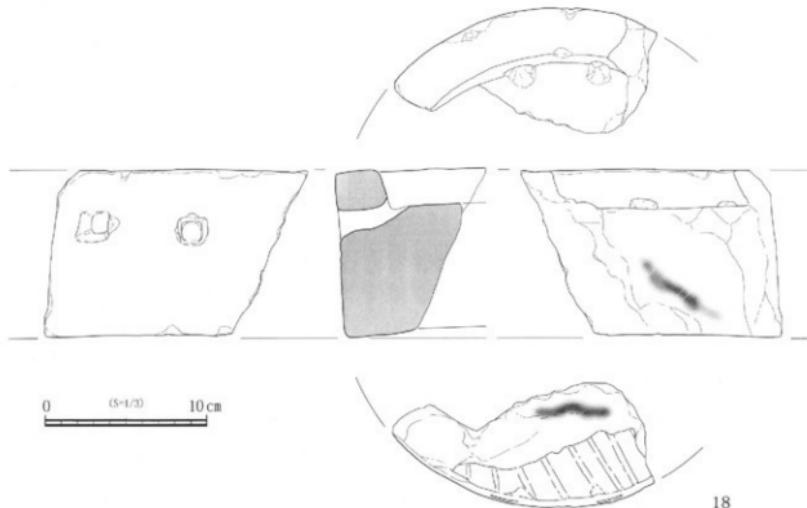
第18図 出土遺物実測図6（中世）

頸部以下の内面は全面、胎土と異なる黒色の色調を呈しており、釉薬のようなものを薄く塗っているように見える。7も古瀬戸系陶器茶壺の胴部小破片であり、6と同一個体の破片と考えられる。8は土師質土器皿の口縁部・体部下位にかけての破片で、内外面にタールの付着が顕著である。体部上位で僅かに外反する器形を呈する。9・10はいずれも土師質土器鍋の口縁部小破片である。胎土には長石や花崗岩粒子が比較的多く含まれるもの、雲母は微粒子が少量含まれるに留まる。いずれも外面に煤の付着が認められる。11は砥石である。長軸方向に従って対向する二側面に使用面を認める他、端部破損面にも傷状の使用痕跡が5か所並んで認められる。16は棒状を呈する断面四角形の鉄製品であり、一方の端部は直角に屈曲している。鉄釘の可能性が高い。

第18図13～15及び第19図18は第3号地下式坑（5層）の出土品である。13は大型の土師質土器皿であり、底部から体部中位にかけて遺存する。底部外面は右回転系切り離し痕を残し、底部内面は大きく窪ませる器形的特徴を有する。体部外面はロクナデ痕を残すが、体部下位はヨコナデを最終調整とする。内面には薄く煤の付着が認められる。14は土師質土器鍋であり、胎土に花崗岩粒・雲母を多く含む。内面口縁部に十字状のヘラ刻みが認められる。15は黒色安山岩製の石鉢である。外面は研磨によって平滑に仕上げられており、特に体部上位（高さの3/2程）と口唇端部は丁寧に磨かれている。これに対して内面は工具によるツキ（突き）痕跡を顕著に残している。第19図18は粉挽き臼（上臼）破片である。側面から穿たれた二孔が上面の窪みに貫通する点が特異であるが、この小孔の壁面は平滑であり、破損を意図した二次穿孔とは考え難い。石材は角閃石や長石粒を含む安山岩である。なお、破損面に煤の付着が認められるが、第3号地下式坑5層からは被熱した破碎體（大型の河原石であったとみられる。写真図版5参照）が出土しており、石棒の破片（第16図50）や花崗岩角礫にも煤の付着が認められた。

第18図12は、第1号住居跡確認面付近から出土した土師質土器鍋の底部破片。胎土に雲母を多く含み、外面には若干の煤が付着する。底部には外周に沿ったナデ調整が認められる。第18図17は第1号井戸跡出土鉄製品で断面は長方形を呈する。第1号井戸跡出土遺物は繩文時代のものが多く、帰属時期を示す遺物に恵まれなかった。

以上のように中世遺物は主に3基の地下式坑に伴う状況である。その所産時期は、第2号地下式坑出土の茶壺が古瀬戸後期様式以後のものとみられ、一方で土鍋の中に器高が浅いものや、器壁の立ち上がり角度が浅いものが認められない点を考慮すれば、大体で15世紀後半～16世紀代の範疇で捉えられよう。（村山）



第19図 出土遺物実測図7（中世）

表3：出土遺物観察表（古代・中世遺物）

本表の凡例：「法則」は谷筋縫の場合、「口径・高さ・底径縫」の記載である。なお、() は推定値、| | は現状での残存値を示す。単位はcmである。
 「胎土」は土器・陶器類の胎土中混入鉱物を記載し、その量を() 内に示した。その他の遺物の場合 | | 内に材質を示した。
 「色調」は土器・陶器類の胎土の色を記載した。表表面等で色が異なる場合は、部位を示し別に色調記載をした。

発掘番号	出土遺物	名称 器種	法則 口径 高さ 底径縫	胎土 〔材質〕	色調	造成	成形・整形・調整	残存率	注記番号	備考
第17回 1	第2号 地下式坑	須恵器 短縫甕	— [29.2] (14.4)	白英(少) 白色粒(少) 黑色粒(少) 赤色粒(極少)	黄褐色 (29Y5/1)	良好	口クロ成形・付高台 / 内外面クロナデ・底部 下位4段以上約3コケズり、肩部及び底部内面 に自然陥没。	口縫部を 除く全体 の1/3	地 1-3/ 地 2-3/ 地 2-7/ 地 2-9/ 地 2-11 砂 1-2.3	
第18回 1	第1号 地下式坑	土師質土器 小皿	(6.0) [2.6]	狎石(少) 白色粒(少)	黒褐色 (7.5Y2/1)	良好	口クロ成形 / 内外面クロナデ / 体部外側下位 なで上げ窓。	口縫部 の1/4	地 1-3	
第18回 2	第1号 地下式坑	土師質土器 鍋	—	花崗岩(中) 長石、石英(多) 墨母(少)	明赤褐色 (5YR8/6)	良好	絞成形 / 内面ナデ、外面オサエ・ナデ。	口縫部 破片	地 1-3	外面 焼付層
第18回 3	第1号 地下式坑	土師質土器 鍋	—	雲母、石英(多) 花崗岩(中)	明赤褐色 (5YR8/6)	良好	絞成形 / 肩部内面ナデ、一部器面剥離・底部 外側板? 压痕後ナデ、周縁に沿ったナデ・胴 部下位に墨母才と後ナデ。	底部充存 の1/3	地 1-2/ 地 1-3/ 地 1-6 も焼付層	
第18回 4	第2号 地下式坑	陶器 片口鋏	—	砂粒(多) 白色粒(多)	灰黄色 (2.5Y6/2)	良好	口クロ成形 / 内外面クロナデ。	体部破片	地 2-3	常滑系
第18回 5	第2号 地下式坑	陶器 碗	—	砂粒(やや多)	暗灰褐色 (2.5Y5/2) 表面面にびいき模様 (7.5Y5/4)	良好	絞成形・内面に絞土細粒2ヶ所 / 内面ヨコナデ・ 外側斜面ヘラナデ。内面に自然難若干付厚。	底部 小破片	地 2-1	常滑系
第18回 6	第2号 地下式坑	陶器 釜	(9.1) [5.3]	—	灰褐色 (2.5Y7/1) 表面面 黒色 (N15-0)	良好	口クロ成形・外側凹輪難輪・内面ロクロナデ 墨書き / 肩部内面に数条の深い縱の柔線(張 筋以前)。	口縫部～ 体部上位 の破片	地 2-10	吉備戸系
第18回 7	第2号 地下式坑	陶器 茶壺	—	—	灰褐色 (10YR2/1)	良好	口クロ成形・外側凹輪難輪・内面ロクロナデ 墨書き。	底部 破片	地 2-4	吉備戸系 6と同一 個体
第18回 8	第2号 地下式坑	土師質土器 小皿	(6.0) [2.6]	白色粒(少) 墨母(少) 赤色粒(極少)	黒色 (7.5Y2/1) 表面面にびいき模様 (10YR7/4)	普通	口クロ成形 / 内外面ロクロナデ。	口縫部～ 体部下位 の1/3	地 2-6	口縫部に 焼付層
第18回 9	第2号 地下式坑	土師質土器 鍋	—	長石(多) 石英(少) 墨母(少)	明赤褐色 (5YR5/6)	良好	絞成形 / 内外ヨコナデ。	口縫部 小破片	地 2-1	外側に 焼付層
第18回 10	第2号 地下式坑	土師質土器 鍋	—	花崗岩(中) 長石(少) 墨母(少)	にびいき模様 (7.5Y5/4)	良好	絞成形 / 内外ヨコナデ。	口縫部 小破片	地 2-1	外側に 焼付層
第18回 11	第2号 地下式坑	石製品 砾石	(7.1) 幅 2.9 厚 (2.1)	花崗岩(中)	—	(特徴) 2側面に使用痕、また、培塿破損面に も使用痕あり。		地 2-3		
第18回 12	第1号 住居跡	土師質土器 鍋	—	雲母(多) 長石(中) 赤色粒(少)	にびいき模様 (7.5YR5/4)	良好	絞成形 / 内面ヨコナデ、外面ユイオサエナデ、 底部外側面縫目に沿ったナデ。	底部 小破片	住一上	
第18回 13	第3号 地下式坑	土師質土器 皿	— [3.2]	砂粒(やや多) 砂粒(やや少) 赤色粒(少) 白色粒(少)	深黄褐色 (10YR8/3) 7.2	やや 不良	口クロ成形 / 内外面ロクロナデ・底部右側斜 面引出し痕・体部外側下位ロクロナデ後のヨコ ナデ調整。	底部～体 部破片、 底部充存	地 3-3	底部内に 焼付層 5層出土
第18回 14	第3号 地下式坑	土師質土器 鍋	(3.2) [1.9]	花崗岩、石英、長 石、雲母(いずれ も多)	明赤褐色 (5YR5/9)	良好	絞成形・内面ナデ・外口ヨコ筋強いヨコナデ、 以下底部外側ナデ後一面にユイオサエ / 口縫 部内面にヘラ十字の刻みを入れる。	口縫部～ 体部下位 の1/6	地 3-3	5層出土
第18回 15	第3号 地下式坑	石製品 鉢	(2.0) [0.9]	花崗岩無質 (10.3)	—	(特徴) 外面研磨面。特に体部上位と口唇面取り 部は艶著なミガキで整容。内面に工具によるツ 牛痕を無認度で残す。	全体の 1/5	—	5層出土	
第18回 16	第2号 地下式坑	鐵鬪頭 鉄釘力	長 (2.7) 幅 0.4 厚 0.3	[鉄製]	—	(特徴) 斜面正方形。端部圓曲。		地 2-1		
第18回 17	第1号井戸跡	石製品 不詳	長 (3.3) 幅 0.9 厚 0.4	[鉄製]	—	(特徴) 斜面長方形。端部圓曲。		井 -2		
第19回 18	第3号 地下式坑	石製品 粉挽き臼 (土臼)	— 14.9	(安山岩質)	—	(特徴) 上面には深さ3cm程度の窪みを作出。 側面から穿たれた二小孔がこの窪みに貫通。 下面はやわらか込み、隠り目を削む。		—	破損部埋 付蓋 5層出土	

第IV章 考察

第1節 権現山遺跡における縄文時代概観

権現山遺跡の調査では試掘・確認調査（1次）と本調査区を併せ一定量の縄文時代の遺物の出土がみられた。いずれも時期は縄文時代中期中葉から後葉で占められており、中期集落が展開しているものと推察できる。

試掘・確認調査区・本調査区とともに各地点による上器型式の傾向に差異はなく、いずれも縄文時代中期後半加曾利E式で主体を占めており、次いで阿玉台式、勝坂式、大木式が若干量の出でる。阿玉台式はほとんどが後半のIV式に比定されるもので、集落の開始が阿玉台式後半であり加曾利E3式、E4式、大木9a式という型式組成が集落の最盛時期と考えられる。

遺物の山上は住居跡から10点程度と当該期の遺構に伴う出土数が極めて少ない。1点はほぼ完形のもので大木8a式と思われるもの。このほかは地下式坑の埋没土からの山上であり縄文時代の遺構に伴つものではなかった。地下式坑に出土をみる遺物の型式も同時期とみられ、集落としての利用はやはり後期までは下らないものと考えられる。調査対象域となった個所では、住居跡のほか、縄文時代の遺構として判断されるものもなく、第1～8号土坑までの上坑も縄文時代にみるフ拉斯コ形を呈するものもなく、時期の判断に苦しむ。1次の試掘・確認調査区では、本調査範囲より縄文時代の遺物が多く出土しており、包含層とみられる遺物集中エリア、数基の土坑が確認されている。

縄文時代中期集落は時期によって大きく変遷を遂げるが、一般的にその構造は、かつて小林達雄が提唱したセトルメントパターンA（註1）のように中央に広場を持ち、貯蔵施設を持つ集会場的な場を有していたとするケースを考えられてきた。そして各地での集落の姿も同様に円を描いたかのごとく環状集落の姿を見せるのが中期後半にかけての集落のおおまかな姿である。そしておなじ場所に何世代にもわたる定住によって、数百にもなる遺構群の最終的な姿となる。

本調査区における集落の展開を考察するにはいまだ十分な資料に乏しいが、遺物の出土量から察するに中期集落の中心域が調査区周辺にあたる可能性は強い。試掘・確認調査（1次）の遺物包含層と想定される範囲や土坑群の拡がりなど、地形的な面などからも判断して集落の中心域を示すものであったとも考えられる。

集落の時期を示す資料に加曾利E式を中心としたがらも、勝坂系や、大木式の遺物が多く混じる事実も興味深い。異系統土器の混入などから様々な地域間交流なども考えられるが、鬼怒川水系でのいくつかの地点で異系統型式の出土が報告されている。本遺跡に程近い下妻市桜塚古墳群の調査（註2）でも大木9式の一定量の出土が報告されており、縄文中期の遠隔地域の文化の拡がりが指摘されている。今回の調査においても報告された、第13図1の深鉢は大木8a式に比定されるものであり、第14図24も加曾利E4式と大木9式の影響が強くみられる。これら周辺での在地系と異系統土器の出土の分布と鬼怒川水系などとの関わりなど、周辺の縄文時代を考えるうえで重要な課題を提示する報告といえる。

（新垣）

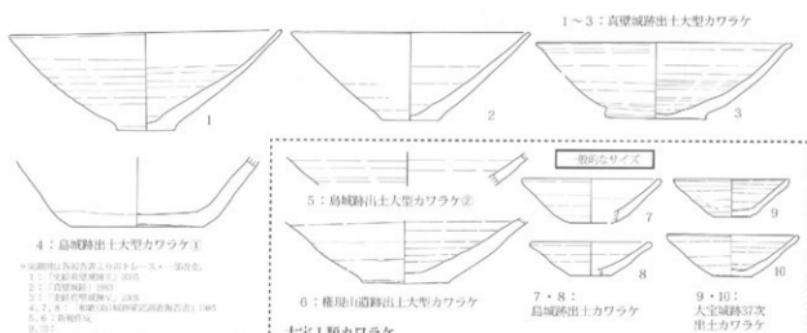
（註1） 小林達雄「縄文時代の集落」『国史学』110・111合併号 1980

（註2） 下妻市教育委員会「桜塚古墳群」2008

第2節 中世の出土遺物 ～土師質土器皿と石臼について～

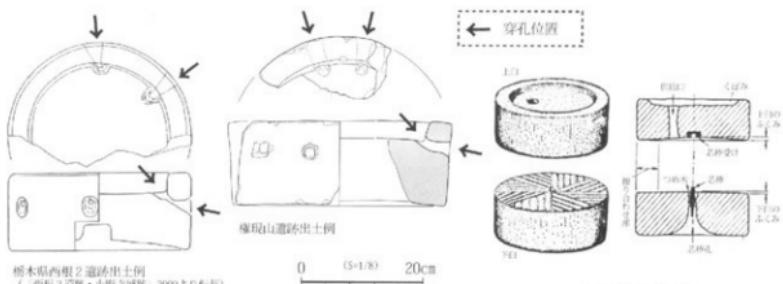
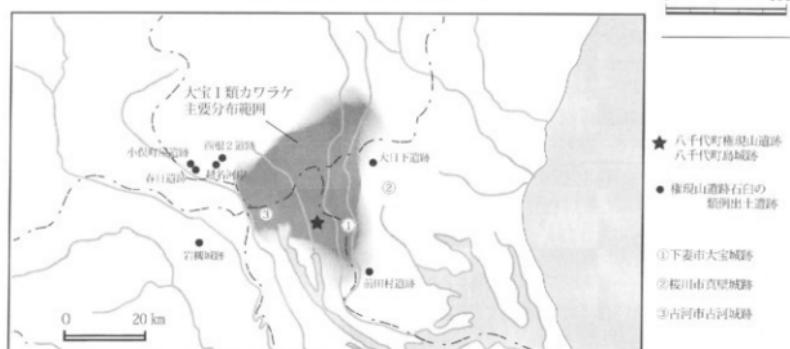
本調査地点では地下式坑3基や井戸跡1基が検出された。このうち地下式坑は縦坑部を南に向けて列を為すように検出されており、周辺域に群在することが推定される。残念なことに中世遺物の多くが天井部崩落後の廃棄物としての検出であり、地下式坑の使用時期を直接的に示すものでは無いが、近世遺物の混入が確認されない点からみて地下式坑廃絶から遺物投棄までの時間差は比較的短いものと考えたい。地下式坑の群在状況から周辺に屋敷跡などの施設が存在する可能性も高く、検出遺物もこれらの周辺施設と関わりを持っているものであろう。

出土遺物において注目されるのは第3号地下式坑出土の土師質土器皿（以下、カワラケと称する）に大型のものが認められる点である。大型のカワラケは桜川市真壁城跡においてはかなりの量が出土しており、15世紀後半か



権現山遺跡出土カワラケとその類例

0 (S-1/4) 10cm



権現山遺跡出土石臼とその類例
粉挽き臼の構造
(三輪茂雄「臼」1970より転載)

第20図 権現山遺跡出土カワラケ・石臼の関連資料

ら 16 世紀いっぱい存在するとされている（註 1）が、他の遺跡においてはごく少なく、1 個体程度の検出であることが普通である。八千代町においても、権現山遺跡の南に所在する和歌島城跡において大型カワラケ（第 20 図 4）が出土しているが、その胎土は赤褐色を呈し砂粒の混人が多いばかりでなく、全体に煤が付着するなど、むしろ内耳上端と共に通する特徴を有し、大きく様相が異なる（註 2）。ところが、島城跡に於いてはもう 1 点大型かわらけの破片の出土が認められる。第 20 図 5 に示したカワラケの体部小破片がそれであり、部位、厚味、円弧のカーブからかなり大形のカワラケであることが確実である。また、胎土の色調・混入物も権現山遺跡出土の大型カワラケに極めて近い特徴を示す。

大型カワラケの破片が出土した島城跡 A 区域跡からは、一般的なサイズの环形カワラケ（口径 10 cm 前後）を数多く出土している。それらのカワラケは、下妻市大宝城跡（37 次調査区地下式坑）の出土資料と同様の特徴を持つものであった。即ち、色調が白色味を帯び、胎土に輝石・角閃石類を多量に含む点や、内底面を横ナデする点が特徴となる一群であり、大宝城報告書分類の「大宝 I 類」に該当する（註 3）。「大宝 I 類」のカワラケは栃木県南部から茨城県西部に分布が確認され、時期的には 15 世紀後半～16 世紀中葉頃に主体があるようである。権現山遺跡出土の大型カワラケとこれら的一般的なサイズのカワラケの特徴（色調・胎土・器形・底部内面の調整）はよく一致しており、「大宝 I 類」の組成に権現山遺跡・島城跡出土例のような大型種が含まれていることを示している。

戰国期においては、多法量のカワラケが饗宴の場で用いられたことが知られているが、本例のような大型カワラケの出土は、当地域にあっても多法量のカワラケを用いる儀礼的饗宴が行われていた事を示しているように思われる。権現山遺跡から大型カワラケが出土した事実は、特殊なサイズのカワラケを必要とした人物の存在を示唆するものであり、遺跡周辺にかなり高い階級の人物が居住していたことを暗示するものと考えられる。なお、「大宝 I 類」カワラケの分布は、古河公方の勢力範囲と関わりがありそうである（註 4）。今後は、同種のカワラケを多数出土した島城跡との関連も視野に入れて、当遺跡の性格を検討すべきである。

今一つ、注目しておきたい遺物として、第 3 号地下式坑出土の石臼がある。この石臼は粉挽き臼の上臼であるが、不自然な事に側面に穿たれた 2 つの小孔が上面の窪みに貫通している。本來、粉挽き臼の上面の窪みには原料を入れ、それが窪み底面に穿たれた供給孔から上臼と下臼の隙間に落ちていき、上臼を回転させることでこの原料を粉末化する構造となっているが、本遺跡出土例では、側面の小孔から、窪みの中に入れた原料がこぼれ落ちてしまうことになる。この小孔の役割を明確にすることは出来ないが、繩などをくくり付けることで小孔を塞いで使用するものなのかもしれない。同様の特徴を持つ石臼は管見の限り茨城県から栃木県周辺の遺跡で出土例が確認され、神奈川県や埼玉県にも少数ながら出土例を確認している。ただし、その数は石臼出土量全体の中にあっては極めて少なく、一般的に普及していたものとは考え難い。分布は利根川の中流域に集中するようであり、特に栃木県足利市・佐野市付近に多く認められる。現状では、用途、分布の意味とともに不明とせざるを得ないが、中世における粉食文化と密接に関わる問題を内包している可能性もあり、今後、同種資料の出土に注意すべきであろう。

（村山）

（註 1）宇留野主税「中世城館研究の課題」『駿良岐考古』第 23 号 2010 ほか

（註 2）山野井哲夫氏の御厚意により遺物を実見、一部実測させて頂いた。八千代町教育委員会「和歌（島）城跡確認調査報告書」1985

（註 3）下妻市教育委員会「岡指定史跡大宝城跡発掘調査報告書」（第 37 次調査）2008 なお、宇留野氏はこのタイプを「鍋底環 A」として、より広視的視点から毎年作業を行っている。

（註 4）宇留野主税・新垣清貴「茨城県西・鹿行地方における中世後期のかわらけ編年」「茨城中世考古学の最前線」2011

（註 5）中山信「土器から見る関東の戦国時代と河越」「後北条氏と河越城」川越市立博物館第 30 回企画展図録 2007 ほか

* 主な引用・参考文献（第 20 図の分布図作成に用いた報告書は削除した）

・栃木県埋蔵文化財調査報告書第 320 集「西根 2 遺跡・小野寺城跡」栃木県教育委員会・県とちぎ生涯学習文化財団 2009

・真壁町教育委員会「真壁城跡～中世真壁の生活をさぐる～」1983

・真壁町教育委員会「史跡真壁城跡Ⅰ」2005

・桜川市教育委員会「史跡真壁城跡Ⅴ」2008

・三輪茂雄「臼」ものと人間の文化史 25 1978 法政大学出版局

第V章 総括

今回の権現山遺跡の調査で検出した主な遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒と中世の井戸跡1基及び地下式坑3基であるが、縄文時代の竪穴住居跡及び中世の地下式坑は、八千代町では初めての調査事例である。そこでここでは八千代町周辺の地域、県西地方で調査された主な事例を紹介し、権現山遺跡の調査の意義について考え総括したい。

縄文時代の竪穴住居跡

権現山遺跡は、第II章第2節でも述べたように、町内でも屈指の縄文時代の集落遺跡であり、広範囲の遺跡内で時期によって中心となる分布域を異にしているが、今回の調査では遺跡の東南部の一部から竪穴住居跡1軒を検出したのみで、縄文時代の集落の様相を明らかにできるものではない。今後の調査による資料の蓄積を待って考察すべき課題である。

周辺地域の主な縄文時代遺跡の調査事例としては、次の遺跡があげられるよう。五霞町の冬木貝塚、旧石下町の鴻野山貝塚、旧三和町の北下山遺跡、結城市の小田林遺跡、鹿塙坂の上遺跡、峯崎遺跡、旧水海道市の人生郷遺跡、旧岩井市の高崎貝塚、旧総和町の帆廻才仏遺跡、下妻市桜塚古墳群の縄文時代集落などがある。

これらの遺跡のうち、人生郷遺跡では前期から中期にかけて11軒、高崎貝塚（註1）では早期から後期にかけて41軒、帆廻才仏遺跡（註2）では中期から後期・晩期にかけて32軒、桜塚古墳群（註3）では中期後半の竪穴住居跡が14軒発見されており、縄文時代集落の様相を知ることができる遺跡である。また出土遺物では、第IV章第1節でも指摘されているように、権現山遺跡や桜塚古墳群の縄文時代集落からは大木系の影響が見られる上器が出上しており、鬼怒川・小貝川流域の地域において東北地方との文化的な交流を示す貴重な資料である。

（註1）（財）茨城県教育財團「茨城県教育財团文化財調査報告書第88集 高崎貝塚」1994

（註2）（財）茨城県教育財團「茨城県教育財团文化財調査報告書第131集 大橋B遺跡・帆廻才仏遺跡」1998

（註3）下妻市教育委員会「桜塚古墳群」2008

中世の地下式坑

権現山遺跡で調査した地下式坑は3基であるが、調査には至らなかったが一次の試掘・確認調査で確認した黒色の覆土を持つ大形の円形の土坑も地下式坑の可能性が強いことから、調査区周辺には少なくとも5基以上の地下式坑が存在することが想定される。調査した3基の地下式坑の形状は、方形が2基、横長方形が1基で、いずれも南北中央部に豊坑を持つものである。地下室の高さは壁際で0.9m～1.0m、中央部の現存高は約1.2mであるが、壁際から天井部へつながる状況から考えると、地下室中央部では約1.5m前後の高さがあったと推定される。地下式坑の性格については、1号地下式坑の底面に大形の焼上・ブロックが点在していたが、3基とも出土遺物も少なく、直接性格を推定できるような状況は認められなかった。

地下式坑は、全国で1,000を超す遺跡から5,500基以上発見されているが、その8割以上が関東地方に集中し、千葉県だけで2,000基を超えている。茨城県では、70数か所の遺跡から200基以上の地下式坑が調査報告されているが、岩瀬から水戸周辺にかけての県中央部、北浦周辺の地域、筑波山周辺から利根川流域にかけての県南地域に大きな分布が認められるようである。

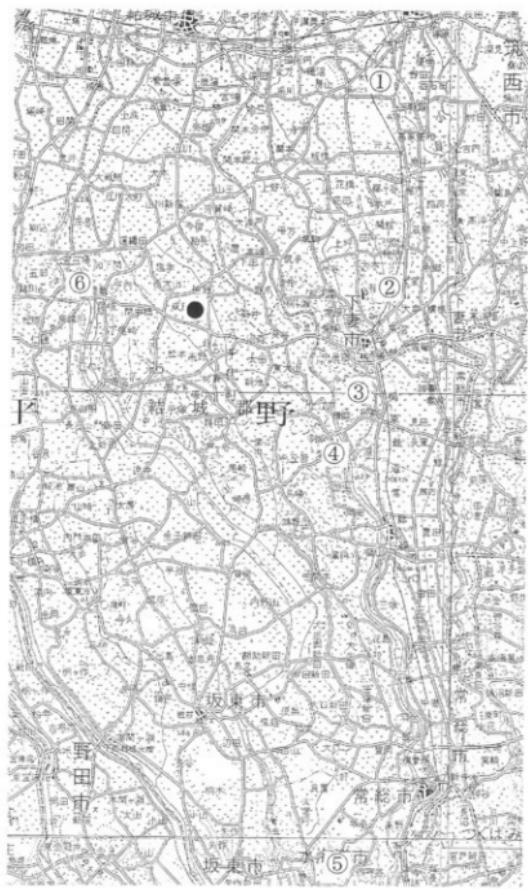
県西地方では、10遺跡ほどで約90基の地下式坑が調査されている。桜川市（旧岩瀬町）の桜川上流域にあたる岩瀬盆地では、辰街道遺跡で1基、当向遺跡で8基、金谷遺跡で28基、犬田神社前遺跡で20基、桜川中流域にあたる筑西市（旧明野町）の中根十三塚遺跡で1基の地下式坑が調査されている。小貝川流域では、筑西市（旧下館市）の野殿深作遺跡で9基、下妻市の大宝城跡で4基調査されている。権現山遺跡の立地する鬼怒川流域では、下妻市（旧千代川村）の下栗野方南遺跡から1基、皆莫遺跡から2基、常總市（旧水海道市）の菅生城址から2基、鬼怒川以西では、西仁連川流域にあたる古河市（旧三和町）の本田遺跡で7基から11基の地下式坑が検出されている。

地下式坑からの出土遺物は少なく、中には皆無のものもある。出土した遺物は、小皿、内耳鍋、土鍋などの上器質の土器片や、常滑、古瀬戸などの陶器片、石臼などが出土しており、15世紀後半から16世紀にかけての年代が

与えられている。調査された遺跡の中には、地下式坑を墓坑として想定しているものもあるが、現在のところ確実に埋葬施設として判断できるものは少ないようと思われる。同時期の遺構や出土遺物、その地域の歴史的な背景を含めて検討することが必要であろう。

鬼怒川流域の地域では、城館跡も含めて分布調査によって 200 か所以上の中世の遺跡が確認されているが、まだ調査事例が少なく今後の資料の増加が望まれる。權現山遺跡の調査は一部ではあったが、県西地域において新たな資料を提供できることに意義があると考える。

(山野井)



第21図 鬼怒川・小貝川流域の地下式坑調査遺跡分布図(1/200,000)

*主な参考文献

- ・茨城県教育財團文化財調査報告書
 - 第91集『野殿深作遺跡』1994、第154集『中根十三塚遺跡』1999、第222集『辰街道遺跡1』2004
 - 第224集『当向遺跡』2005、第225集『金谷遺跡1』2005、第254集『金谷遺跡2』2006
 - 第229集『犬田神社前遺跡1』2004、第248集『犬田神社前遺跡2』2005
- ・千代川村教育委員会『下栗野方南遺跡発掘調査報告書』1996、『併奥遺跡発掘調査報告書』2003
- ・下妻市教育委員会『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書(第37次調査)』2008
- ・常総市教育委員会『吾生城址』2007、古河市教育委員会『本田道路』2010
- ・房總中近世考古学研究会・東国中世考古学研究会『全国地下式坑集成資料』2007
- ・東国中世考古学研究会『中世の地下室』2009

報告書抄録

ふりがな 書名	ごんげんやまいせき 権現山遺跡							
副書名	集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査							
シリーズ名	八千代町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	14							
編集著者名	村山 卓 新垣清貴 及川讓作 山野井哲夫							
発行機関	八千代町教育委員会							
所在地	〒300-3572 茨城県結城郡八千代町大字菅谷 1170 TEL 0296-48-0525							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
権現山遺跡	茨城県結城郡 八千代町大字 菅谷	08521	36° 11' 37"	139° 53' 24"	20090217 ～ 20090323	203	集合住宅 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
権現山遺跡	集落	縄文時代	堅穴住居跡1軒	縄文土器 磨製石斧、磨石外	縄文時代の堅穴住居跡は 町内初の調査事例			
		飛鳥・平安時代		須恵器短頸壺				
		中世	地下式坑3基 井戸跡1基	上師質土器小皿、鍋、 内耳鍋 陶器、石鉢、石臼外	中世の地下式坑は町内初 の調査事例			
要約	権現山遺跡は、旧石器時代から縄文時代、奈良・平安時代にかけての集落遺跡で、特に縄文時代が中心の遺跡とされていたが、今回の調査で中世まで下ることが確認された。 縄文時代の遺構では、今回の発掘調査で、町内で初めての縄文時代の堅穴住居跡を検出し、また縄文時代中期の深鉢形土器の良好な資料を得ることができた。 中世の遺構では、井戸跡1基及び地下式坑3基を調査したが、地下式坑は町内で初めての調査事例である。県西地方でも地下式坑の調査は10遺跡ほど報告されているが、あまり例は多くないと言える。今回の調査で新たな資料を追加することができた。							



調査区全景（南から）



第1号住居跡・東西ベルト土層断面（南から）



第1号住居跡遺物出土状況（第13図2）



第1号住居跡・南北ベルト土層断面（東から）

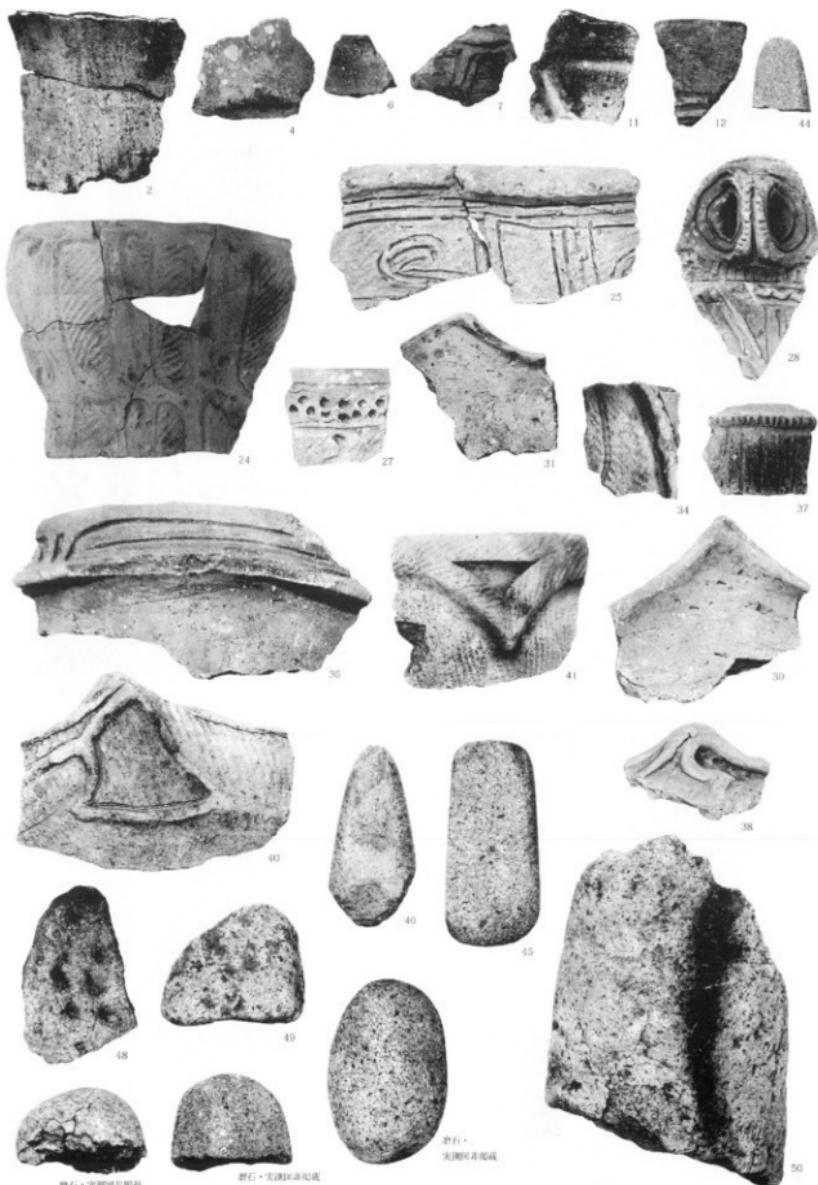


第1号住居跡完堀状況（南から）



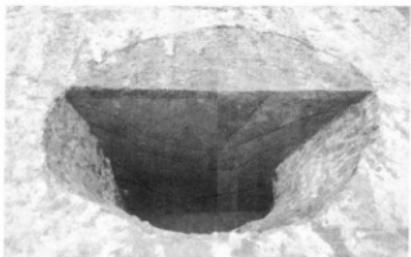
第1号住居跡出土繩文土器（第13図1）

写真図版 2

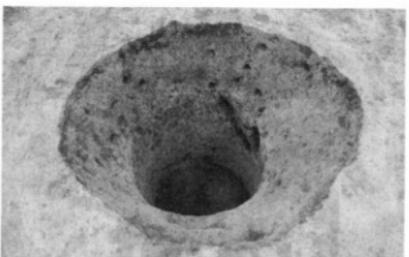


縄文時代の土器・石器（第13図～第16図）

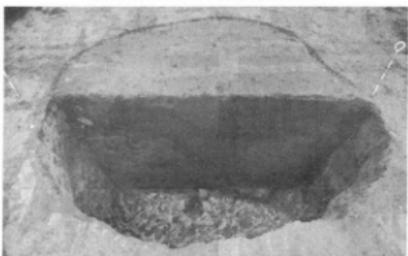
(5=1/3で模倣。ただし48・49は5=1/4、50は縮半任意。)



第1号井戸跡上層断面（南から）



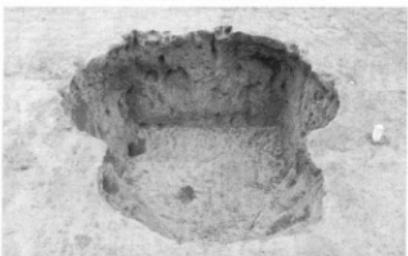
第1号井戸跡完堀状況（南から）



第1号地下式坑上層断面（南から）



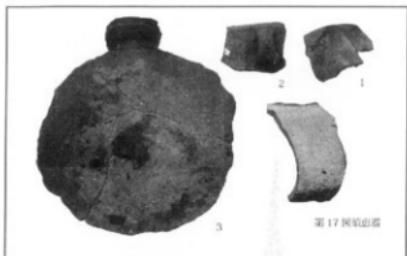
第1号地下式坑竪坑部分土層断面（東から）



第1号地下式坑完堀状況（南から）



第1号地下式坑完堀状況（西から）



第1号地下式坑出土遺物（第17図、第18図1～3）

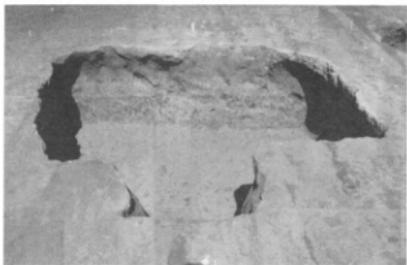


第2号地下式坑竪坑部分遺物出土状況（北西から）

写真図版 4



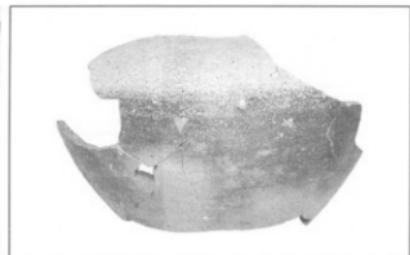
第2号地下式坑土層断面（南から）



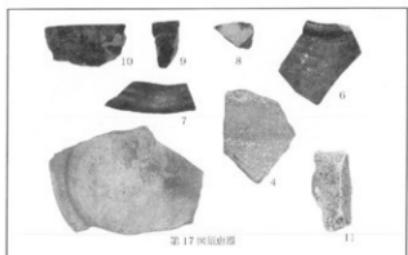
第2号地下式坑完掘状況（南から）



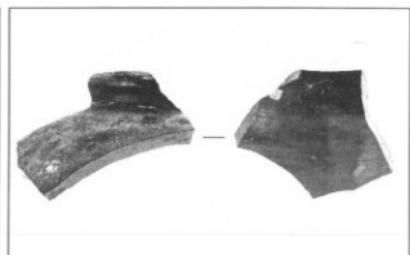
第2号地下式坑完掘状況（北西から）



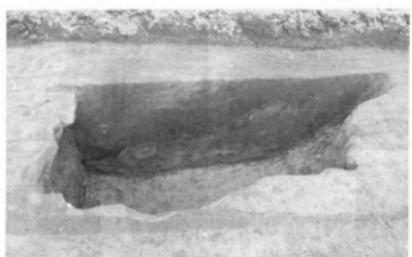
第2号地下式坑出土遺物（第17図）



第2号地下式坑出土遺物（第17図・第18図4～11）



第2号地下式坑出土遺物（第18図6）



第3号地下式坑土層断面（西から）



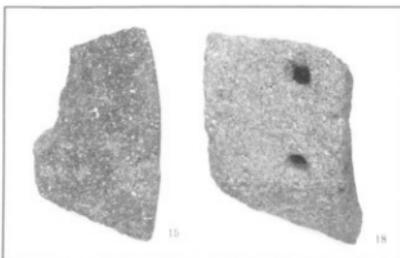
第3号地下式坑遺物・礫出土状況（南から）



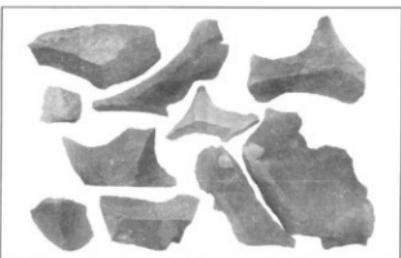
第3号地下式坑完掘状況（南から）



第3号地下式坑完掘状況（北西から）



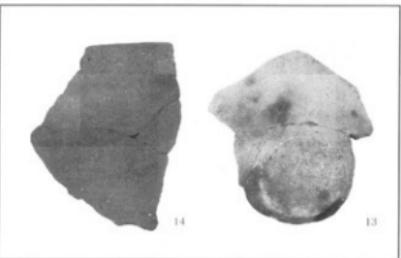
第3号地下式坑出土遺物（第18・19図）



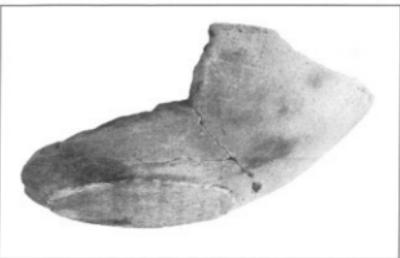
第3号地下式坑出土被熱燶



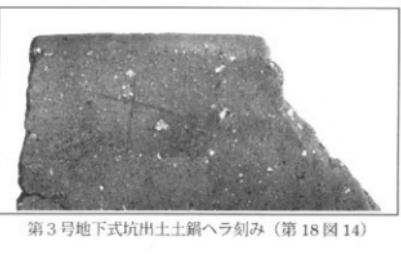
第3号地下式坑出土遺物（礫類）



第3号地下式坑出土遺物（第18図）



第3号地下式坑出土遺物（第18図13）



第3号地下式坑出土土鍋ヘラ刻み（第18図14）

八千代町埋蔵文化財調査報告書 14

茨城県結城郡八千代町大字菅谷

権現山遺跡

—集合住宅建設に伴う遺跡の発掘調査—

平成 23 年 3 月 31 日 発行

八千代町教育委員会